Ritsumeikan University
College of Letters

# 教学の手引き
# 2005

## 人文総合科学インスティテュート
## 学際プログラム

## 文学部

Table of Contents

# 人文総合科学インスティテュート　学際プログラム


## Ⅰ 人文総合科学インスティテュート学際プログラム　教学紹介

人文総合科学インスティテュート学際プログラム

1 教学目標とカリキュラム …… 3
2 小集団教育科目 …… 3
3 外書講読 …… 4
4 講義科目 …… 4
5 卒業論文 …… 4
6 テーマリサーチ型ゼミナール …… 5
7 履修モデルについて …… 5

言語文化（言語・芸術系インスティテュート）

1 教学目標とカリキュラム …… 6
2 １・２回生小集団教育科目 …… 6
3 外書講読 …… 7
4 講義科目 …… 7
5 卒業論文 …… 7

芸術表象（言語・芸術系インスティテュート）

1 教学目標とカリキュラム …… 8
2 小集団教育科目 …… 8
3 講義諸科目 …… 9
4 外書講読 …… 9
5 卒業論文 …… 9

歴史人類領域

1 教学目標とカリキュラム …… 10
2 １・２回生小集団教育 …… 10
3 講義科目 …… 11
4 外書講読科目 …… 11
5 卒業論文 …… 11

研究入門の栞 …… 12

卒業論文の栞 …… 13

## Ⅱ 履修方法とユニットプログラム　履修モデル


1 科目一覧 …… 24
2 履修方法 …… 27
3 受講登録上の注意 …… 28
4 ユニットプログラム …… 29
5 履修モデル …… 32


## Ⅲ 学修を進めるにあたって


1 文献資料室と共同研究室 …… 37
2 クラスロッカーの使用方法について …… 37
3 セミナーハウスの正課用利用の手引き …… 38
4 学生印刷室の利用について …… 39
5 自主ゼミ援助制度について …… 40
6 「小集団教育推進補助費」の取り扱いについて …… 40
7 清心館「学生談話室」の利用について …… 41
8 立命館大学人文学会 …… 41
9 文学部事務室について …… 42

# I

# 人文総合科学インスティテュート
# 学際プログラム　教学紹介

# 人文総合科学インスティテュート・学際プログラム

## 1 教学目標とカリキュラム

「人文総合科学インスティテュート」は、近年の世界の変動と人文諸科学の多様化に呼応し、学生の新たな領域への関心に応えるために、認知科学、比較文学・比較文化、芸術表象論、現代アジア研究、文化人類学の５領域（2003年度入学生からは３領域：以下同じ）を中心に学際的な分野をカバーするものとして、96年度から文学部に開設されました。その狙いは他の10専攻と補い合いながら、旧来の専門性とは異なる人文科学の先端的で批判的な学際領域の開拓と教育をおこなうことにあります。

学生ひとりひとりの関心と目的を生かすために、人文総合科学インスティテュートの専門科目からどのように選択し組み合わせるかということについては後に履修モデルに即して説明しますので、ここではまずその全体の構成を示します（科目編成表参照）。

科目は大きく３群からなり、第一にインスティテュート学際プログラム教学の幹ともいえる、小集団でおこなわれる１、２回生向けの「人文総合科学研究入門」「人文総合科学基礎講読」、そして３、４回生向けの「人文総合科学演習Ⅰ」「人文総合科学演習Ⅱ」が各学年に置かれ、最初の３つが登録必修、４回生時の「人文総合科学演習Ⅱ」が４単位の「卒業論文」と並んで必修となります。第二に、人文科学教学におけるもう一つの柱である外国語講読科目が「外書講読Ⅰ」「外書講読Ⅱ」「外書講読Ⅲ」「外書講読Ⅳ」としてそれぞれ２回生、３回生に配当されます。また「人文総合科学各論」という通称でまとめられた概論科目群が各１回生、２回生、３回生に配当されます。１、２回生時の概論科目は各領域の全体像と問題のありかを提示することに中心が置かれ、３回生時の概論科目は、よりたちいった問題への接近法を示すものと考えてください。またとりわけ３回生時の各論科目には１セメスター２単位で「特殊講義」あるいはそれに相当する科目として、各領域のもっとも先端的な問題に限定し、検討を深める授業も用意されます。領域ごとの科目の特徴ついては各領域の説明を見てください。

基礎科目および人文科学総合講座科目で得られる知識を基礎に、インスティテュート学際プログラムの３つの科目群と他専攻の専門科目から選んで履修した科目を組み合わせることで、既存の専攻領域で長い蓄積によって培われた学問の体系と、新たな学際的な知見を総合しつつ、学生のみなさん一人一人の問題意識に即した勉強ができるものと期待しています。基礎科目、人文科学総合講座科目の選択には、履修モデルごとに推奨される科目の表を参考にしてください。

インスティテュート学際プログラムの学生は、入学時は３つの領域を仮所属として選択し、３回生進学時に正式所属する領域を選択します。また３回生進学時に一定の条件のもとで既存の10専攻への移動も可能です。以下の科目の説明そして履修モデルの説明にも明らかなように、インスティテュート学際プログラムのカリキュラムは、大学での勉学の中軸となる３、４回生演習も含めて、学生のみなさん自身の目標の設定にしたがってきわめて柔軟に履修できるように組み立ててあります。３回生時に正式に所属する領域は、こうした自由なカリキュラムの条件のもとで、学生のみなさんの四年間の勉学の軸となり、主要な外国語の選択を方向づけることとなります。また2003年度以前入学生で教職課程を履修する学生にとっては選択可能な教職科目を決めるものともなるので、３回生時の正式所属の選択のことを念頭に置いて１回生から自分の勉強を組み立ててください。

## 2 小集団教育科目

インスティテュート学際プログラム教学の幹をなす小集団科目である「研究入門」「基礎講読」「演習Ⅰ」「演習Ⅱ」について説明を付け加えておきましょう。「人文総合科学研究入門」では３つの領域に共通する視点と問題意識そして研究手法を、今日の激しく変動する世界をとらえるために必要な人文科学における総合性とは何かという問いを念頭において学びます。

研究入門での基礎的な視点の獲得をへて、２回生では「人文総合科学基礎講読」で基礎的なテクストを読むことを通じて問題意識を深めます。この講読の授業は３回生進学時点での領域帰属へ向けてゆるやかに領域を絞りこむ

ことと、複数の領域への関心を広げ深めることとの両方を狙っています。３つの領域を有機的に組み合わせて、学生のひろい関心に応え、また一つの主題に複眼的な視点が獲得されるよう組み立てられています。各領域の担当者が「基礎講読」で何に主眼を置いて授業を進めるかについては、各領域での説明を見てください。

そして「演習Ⅰ、Ⅱ」では３、４回生合同のゼミ形式で、卒業論文としてまとめることを目標に各自の問題を展開してゆきます。多様な問題意識に応えつつ、３、４回生において関心を絞ると同時に総合性・学際性を追求するという目標を実現するために、領域の区別をこえて複数の演習への登録が認められます。したがって意欲ある学生は自分のテーマを複数の教員の指導で、複数の視点から深めることが可能になります。演習は各領域の担当者ばかりでなく、可能な範囲でインスティテュート学際プログラム以外の担当者にも開設してもらい多様性をもたせるよう工夫されています。したがって自分の帰属する領域の担当者のみに限定せず枠を広くとってよく考えて選択してください。

後の履修モデルの説明でもふれますが、いくつかの領域、さらには学部内の他の専攻にまでまたがった履修計画をたてて積極的に学際性を追求し、さらに３、４回生ゼミでも複数の演習に参加するといった学生がどんどん出てくることを期待しています。たとえば言語批評と芸術表象の結合、比較文化と人類学の結合など、みなさんの新鮮な関心と問題意識が、新たな人文科学の豊かな可能性を開いてゆくことでしょう。そして同時に、人文科学が大学にいる間だけの関心の対象ではなく、動きつつある現代の世界に立ち向かうみなさんの知の武器になりうることを再発見してもらいたいと思います。

１、２回生の間に、さまざまな機会を通じてどの教員の演習を選択するのが自分の関心にとってもっとも適切か、また一つの領域に限定せずに演習を選択するとすれば、どのような組み合わせでとるべきか、よく考えて２回生の終わりの予備登録にそなえてください。より詳細な説明は予備登録の時におこないます。

## 3 外書講読

次に「外書講読」について説明します。２回生、３回生でおこなわれる外書講読は、単なる外国語の習得のための授業ではなく、それぞれの研究領域における海外での研究業績そして資料を、その原語で読み、考える機会をえるためにおこなわれます。考えるための素材を日本語の制約から解き放し、外へ向かって広げるための第一歩が「外書講読」だと言えるでしょう。それゆえここでは外国語の読解能力の養成とともに、テクストに関連したさまざまな文献に関心を広げてゆくための訓練も重視します。そのため２回生の「外書講読Ⅰ・Ⅱ」は登録必修科目として指定されています。各自の関心と目的にそって、学習すべき外国語を選択して下さい。

ただ現実にはすでに習得している英語と、初修外国語とでは段階の差があるので、初修外国語の２回生の外書講読では語学力の養成にかなり重点を置き、領域ごとの専門的な文献講読は主に３回生の外書講読でおこなわれることになります。各領域ごとの外書講読の教学目標は各領域での説明を見てください。特に「言語文化」領域ではその専門の性格上、特に外国語を重視しており、必修の心構えで習得することが望まれます。ただし他の領域でもそれは同様であることを明記しておきます。

## 4 講義科目

講義科目は基本的に概論科目（「人文総合科学各論」）と特殊講義からなっています。それぞれの科目の教学目標は各領域の説明を見てください。

## 5 卒業論文

４年間の大学生活の総決算ともいえる卒業論文の作成の指導は小集団科目「演習Ⅱ」「卒業論文」でおこなわれます。したがって４回生ゼミはひとつだけの場合はもちろん複数選択の場合も卒論作成のことを念頭において選んでください。卒論作成の詳細は『卒業論文の栞』で説明します。

## 6 テーマリサーチ型ゼミナール

テーマリサーチ型ゼミナールは、2003年度からスタートした、文学部が擁する従来の枠組みでは捉えきれない人文学のあらたな分野やテーマ、アプローチを、ゼミ形式で大胆に実践していく、まったく新しい形態のゼミナールです。21世紀の「知」のグローバリゼーションを目指して、人文学に共通する普遍的なテーマ、特定地域を多面的にリサーチしうるテーマ、現在進行形のタイムリーなテーマ、新世紀の社会に直結する実践、実習的テーマなど、現代社会が人文学に求める革新的テーマを設定します。また、テーマリサーチ型ゼミナールでは革新的・斬新なテーマを追求するためにも、常にゼミテーマを見つめ直しています。

３回生のゼミ選択の際には、卒業時（４回生）にどのようなテーマで研究をし、卒業論文執筆をしたいかといった事を考え、ゼミを選択します。その際、自専攻のゼミ、テーマリサーチ型ゼミナールといった選択肢の中で自分に適するゼミを選んでください。

テーマリサーチ型ゼミナールでどのようなテーマのゼミが開講されているのかはシラバスで確認をして頂きたいと思いますが、以下に2005年度、３回生ゼミのいくつかを記しますので是非参考にしてください。

2005年度３回生ゼミテーマ　例）

他者問題と文化理解、文化としての「移動」２、京都から発信する京都文化学、辞書をつくる、ECOTOURISMエコロジーの旅２、

## 7 履修モデルについて

人文総合科学インスティテュートの専門科目の構成は編成表に示したとおりですが、これはまだ料理の名前がならんでいるだけのメニューのようなものです。そのなかから何を選んで実際に味わい身につけるかはあなた方自身の選択によって決まります。できるだけ拘束を減らしてそれぞれの学生の問題意識に即して自由に勉強の組み立てができるようにカリキュラムは配慮されています。ただ逆にその分だけ選択に迷ってしまうということもあります。「履修モデル」は、みなさんの選択と組み立ての具体的な手掛かりとして、こうした関心にはこうした科目選択が可能であるという実例を示すものです。これを参考に４年間の自分の勉強の計画を組み立ててください。

各領域の説明の部分で、２つづつ履修モデルが例としてあげてあります。いずれの領域も、比較的新しい学問分野として、いくつかの共通の特徴をあげることができるでしょう。すなわち新たな分野としての、既存分野への「批判」、「造形」あるいは視聴覚的な表象への関心と、さまざまな「表現」の試み、「テクスト」への新たな視点、そして現場あるいは「フィールド」の重視です。こうした４つの要素がそれぞれの領域ごとの特徴を帯びて組み合わされています。そのことに注意しながら科目の編成を検討してみてください。そしてこれらのモデルを参考に、４年間の勉強をうまく組み立ててください。

# 言　語　文　化

## 1 教学目標とカリキュラム

21世紀を迎えた現代世界の歴史的展開は、19世紀以来の民族国家の枠組とその中で形成された単一的な民族文化を越えて、いまや、異質な伝統をもつ諸文化がその独自性を保ちつつも互いに融合し、相互理解に基づいて共存する地球的統合と多元文化主義へと新しい動きと展開を見せはじめ、一方、アメリカの「超大国」のふるまいに世界が揺り動かされ始めています。この歴史的趨勢の中にあって、物心両面の人間の営みにおいて、国際的交流は必然化し、グローバルな感覚や視野の重要性はますます高まりつつあります。この歴史的転換期にあって、たとえばヨーロッパでは、民族国家間のこれまで長年にわたった政治的確執や覇権競争と宗教的・文化的対立に終止符を打ち、ひとつのヨーロッパ理念の下で異質なるものの共存を志向する政治的・経済的、そして文化的統合への道の模索が、日々、進められています。はたしてヨーロッパにおいて打ち出されたこの理想が、今後人類の歩むべき異文化共存のモデルとして、人類全体の未来を約束する普遍原理たりうるか否か、わたしたちはもう一度、ヨーロッパとは何かをふりかえりながら、考え直してみなければなりません。ヨーロッパに範をとりながら、結果として、地球上に多くの血を流してきた過去を背負うわたしたちは、自らの過去をふりかえることにも力を入れざるをえず、かといって、ヨーロッパの試みがいま踏み出そうとしている方向性からただ学ぶだけでは済まされない位置に立っています。つまり、学ぶべきところは正しく学びながら、ひとりひとりの地球像、わたしたち自身の未来のヴィジョンを立ち上げていかなければなりません。

「言語文化」では、このような見地から、学生諸君には英語に偏らず最低二つは欧米言語を習得するよう促すことで、ヨーロッパ地域の過去から現在に至る文化生成の過程に対して理解を深めさせ、さらに、比較文化・比較文学の方法を用いながら文化現象を相対的な目でとらえられる思考力を身につけさせるよう教育指導を行います。

具体的には、ヨーロッパ文化の多様性に可能なかぎりふれるべく、大きくドイツ語文化圏・フランス語文化圏・イタリア語文化圏という入口を設け、さらにこれをおぎなう形で、スペイン語圏や北欧語圏ほか、周辺文化をめぐる学生諸君の関心にも柔軟に対応できる間口の広いヨーロッパ研究の場を提供していくつもりです。

また３回生以降の学生には、古今東西の諸文化を自在な切り口で切る新趣向の講義や、ジャンルにとらわれない横断性を尊重するゼミなどを用意して、多様な文化が共存しうる世界を切り拓く新しい感性と知性の開発・錬磨をめざします。

これからの学生諸君にとって、何より重要なのは、ヨーロッパを深く知ること―それは単なるヨーロッパ礼賛に終わらない、より踏みこんだヨーロッパとの交通の可能性を自ら案出することであると思います。ヨーロッパは、ヨーロッパそのものを問い直す方法についてもわたしたちに多くのヒントを授けてくれます。この百千錬磨のヨーロッパ知性と互角に渡り合っていける能力の獲得が強く望まれるのです。日本では、かつて福沢諭吉や内村鑑三や夏目漱石ら明治の英学者は、英語の習得を通じて、鎖国時代の日本が身につけられなかったことのすべてをそこから学ぼうとしました。ヨーロッパを批判できるだけの主体的知性の確立が求められる中でです。そしていま、英語に精通するだけでは身につけることのできない多様な世界観を獲得する着実な道として、もうひとつの外国語に触れることの新鮮な悦びを味わってもらいたい。これが、担当教員全員が諸君に望むところです。

## 2 １・２回生小集団教育科目

１回生向けの「研究入門」はインスティテュート共通ですが、将来、「言語文化」領域に所属したい学生のみなさんには、できるだけ広い視野を身につけることはもちろんですが、もうひとつデータやテキストや映像を丹念に読みこんでいく技術をしっかり習得してもらいたいと思います。より好みせずインスティテュートならではの守備範囲の広さを実地に確かめてください。

２回生向けの「人文総合科学基礎講読」は「研究入門」を終えたみなさんに、少しずつ専門的な研究方法を授けていく科目で、言語と文化でも１・２のクラスを開いて、文献収集や文献精読の方法を身につけられる授業にした

いと思っています。なにを読むのかの判断はある程度みなさんに任せながら、どう集め、どう読むかについて、学問研究の先輩である先生方から教わるべきことは少なくないはずです。小集団教育のメリットをいかして、どしどし自分から相談してみてください。この時期にある程度、卒論の方向性を見出しておくと、３回生時の「演習Ⅰ」の選択時にも迷わずに済むでしょう。「基礎講読」は２コマまで受講可能ですから、積極的に複数受講することも選択肢を広げるのに役立つでしょう。

## 3 外書講読

「言語文化」では専門科目で習得した知見をより着実なものにし、受容された知識に基づく自己の見解を積極的に外に向けて発信していくために、外国語の総合的運用能力の養成を特に重視しています。そのため外書講読が基幹科目として位置づけられており、２回生の外書講読は登録必修科目とされています。比較文学・文化の理論や実践に関するもの、各国の文化史上のトピックに焦点を当てたもの、あるいは現代社会の文化状況の総体を論じたものなど、取り上げられる文献のテーマは多岐にわたりますが、正確であるとともに、柔軟な感受性に富んだ読解力の涵養が求められます。そのために、２回生時から必ず外書講読を受講することが望まれます。外国語を積極的に学ぶことで、卒業論文の作成や将来の進路選択に備えてほしいと思います。

なお「言語文化」では外書講読（英語）を開きませんが、これは英語を無視するというのではなく、英語を身につけた上に、もうひとつの欧米語の習得をみなさんに促すためで、英語読解力を向上させたいみなさんは、他領域開講の外書講読などを積極的に履修するよう希望します。

## 4 講義科目

講義科目は、①比較文学・文化の方法を踏まえた比較文学・文化科目群、②ヨーロッパおよびヨーロッパ文化科目群、③文化現象の根底について考察する、批評・思想科目群の３系列からなっています。先生方の専門とされる最新の研究動向や成果に触れる絶好の機会ですから、研究書を一冊ひもとくつもりで、積極的に受講してみてください。

## 5 卒業論文

卒業論文の具体的指導は、３回生「演習Ⅰ」および４回生「演習Ⅱ」の中で個別的に行われます。「演習Ⅰ」「演習Ⅱ」の受講登録は帰属する領域の枠にとらわれず、みなさんのゼミ選択の希望にゆだねられていますから、事前のガイダンスに出席し、また不明な点はあらかじめ先生方に相談することで、早めに心構えを整えておくようにしましょう。よい論文を書くには、たくさんのよい論文を読まなければなりません。そして後は書きなれることです。１回生、２回生のあいだから、レポートを書くたびに「書き方」を工夫する心がけが、思い出に残る卒業論文をしあげる秘訣です。

# 芸　術　表　象

## 1 教学目標とカリキュラム

「芸術表象」の領域は、芸術／表象の問題に取り組む知の実践、すなわち美術史・美学・芸術学・表象文化論・比較文明論・哲学・思想・批評などを横断しながら、人間の表現と認識の問題を考えていく領域です。

20世紀は、かつてあらゆる意味で特権的な場にあった「芸術」という現象が、大衆文化や複製技法、あるいは秒進分歩するメディアの体制のなかに消費、解体されていった時代でした。一旦そこでは「芸術」のアウラは消滅したといわれ、現代ではさまざまな芸術家の試みの末に、芸術を行為しない芸術や、素材と交渉せずに概念を示すのみの芸術など、否定的な提示によって芸術の生き残りをはかるような事態をみせています。しかしその一方でそうした芸術は、現代の生命科学や環境論、歴史の古層の純粋化、伝統の復活などと安易に結びつけられてしまい、再び「神聖さ」をもって祭り上げられる場合も少なくありません。そこでは芸術がもつ「表象」というはたらきの複雑さや危うさに対する、現代人の忘却がしめされているといえます。

「芸術」は、かつて政治や宗教の権威に奉仕し、一方的に単一的な原理を社会に提供するという大役を課せられていた時代のものであっても、またその機能が失せた現代のものであっても、人間という存在の「限界」をあきらかにしながら、芸術／表象のゆたかな展開を開いていくものであることを、私たちはこの21世紀の冒頭に立って、新たに認識しなければならないでしょう。

したがって「芸術表象」の領域では①太古から現代までをつらぬく文明と民族の芸術の歴史を踏まえ、その具体的な作品／表現を「伝統」「アイデンティティ」「ナショナリズム」などの視点から検証や解釈をする方法論と実践を身につけるとともに、②映像や現代メディアを通じての表象の限界と可能性を、現代のアクチュアルな問いを横断しながら探求すること、そしてまた③近代・現代の芸術批評史を学び、みずからが批評の実践者をして記述し表現するという訓練までをもおこないたいと考えます。

「芸術表象」では、美術であれ映画であれグラフィティであれ、あるいは文学であれ最新メディアであれ、芸術／表象に関与する最も困難な問題を扱うこと、つまりはたとえば流通するニュー・アートヒストリーの単純な社会学的方法論の移入や、単純に「相対性」や「他者性」を語る文化論などを常に批判し、表象の問題のなかで何が信じられてきてしまったか、あらためて問いただす作業として位置づけたいと思います。

それはまた、芸術の生成の困難を現在（21世紀）の状況のみに特化するのではなく、芸術／表象の生成・成立の困難さを歴史的問題として捉えていく眼を養うことです。したがってそれは美術なら美術にのみ特化することではなく、人間の共通感覚（センスス・コムニス）から横断的に生成しようとする、広義の批判的なものを問いに付し、芸術／表象への批判を存分におこなうという実践をめざしています。

## 2 小集団教育科目

1）１回生の「人文総合科学研究入門」においては、「言語文化」「芸術表象」「歴史人類」という三つの領域についての基礎的な原理や概念、また研究のための基本的方法を学びます。すなわち、まず各領域の基礎的な知識を得、次にそれをいかに問題意識へと展開させていくのかについて習得します。そして、「先端的」な問題意識や研究テーマ・内容などにも触れ、今後の学習への手引きとします。

2）２回生「基礎講読」

１回生時の「人文総合科学研究入門」を承けて、ゆるやかなコース選択が始まります。「研究入門」で修得した自主的学習態度や、本インスティテュートの学問領域についての基礎的学力を土台に、造形表現・言語表現についての理論や方法論、あるいは研究史に関する基本文献、さらにはこの分野における優れた先学の研究の渉猟と読解訓練を通じて、実践的研究能力を身につけてゆくことに、この科目の狙いがあります。と同時に、この研究作業そのものが３回生以降の各自の研究課題を設定する準備段階をなすことになります。

## 3 講義諸科目

講義科目、（１）美術史を中心とする芸術の歴史にかかわる科目群、（２）映像や現代メディアの表現と表象の問題をめぐる科目群、（３）芸術と社会、制度および批評にかかわる科目群などの有機的連関のもとに開講されます。１回生に配当されている、「映像原論」、「民族と文明の美術史」、「美と芸術の論理（教養科目）」、２回生以上に配当されている、「オリエント美術史」、「ヨーロッパの美術・デザイン」、「映画史」、「現代美術論」、「西洋近代美術史」、「日本絵画史」、「美学・芸術社会学」、「仏教美術史」などの科目群は方法論的基礎の習得には不可欠な科目ですので、あらかじめ3回生時の正式所属を展望して、必ず履修しておいてください。「京都の美術」、「芸術とメディア」、「映像と社会」、「民族と芸術」などの科目では、より対象と方法論を尖鋭化したかたちで学んでいきます。

## 4 外書講読

広く世界の芸術・表象のテーマを読解していきます。取り上げられる文献のテーマは多岐に亙りますが、外国語文献に親しみ、正確であるとともに柔軟な感受性に富んだ読解力の涵養が求められます。

## 5 卒業論文

卒業論文は小集団教育を軸とした自主的学習の総仕上げであると同時に、４年間の学問的研鑽の果実をなすものです。全精力を傾注してこれに取り組み、悔いのない研究論文にまとめ上げてください。３回生終了時までには少なくとも取り上げるテーマの骨格を決定し、４回生当初から論文作成に必要な文献や資料の収集にとりかかれるよう、余裕をもって臨んでください。（詳細は『卒業論文の栞』を参照のこと。）

# 歴　史　人　類

## 1 教学目標とカリキュラム

20世紀はよく「戦争の世紀」と呼ばれてきましたが、そこでいう戦争はここ数十年のうちに大きな変容を遂げてきました。世界規模での核兵器の拡散によって国民国家全体を巻き込む世界大戦が不可能になって以来、戦争はより微細な形態で日常に偏在するようになり、その主体も国民国家に限定されることはなくなってきました。とりわけ、経済のグローバリゼーションと「宗教的原理主義」と名付けられた現象に伴って、暴力の形態も「戦争」と「テロリズム」の差異を曖昧にし、あたかも国家と個人が鏡像関係にあるかのように、相似した形態の暴力を世界規模の広がりをもちつつ繰り広げるようになってきました。

こうした変化の背後にあるのは、いうまでもなく社会・経済領域でのグローバリゼーションと、それに抗う各地域の文化形態との葛藤なわけですが、必ずしもそれは社会において表出するわけではなく、むしろ我々個人の身体の領域にまで浸透するようになっています。とりわけ、ジェンダーをめぐる政治はグローバリゼーションによる普遍的人権概念の普及に伴い、伝統的なジェンダー・ロールを攪乱し、各社会に暮らす我々一人ひとりの同一性と差異について大きな影響を及ぼすようになってきました。

そこで「歴史人類」領域では、上記のような現代社会のラディカルな変化をよりよく理解するため、「エスニシティ」、「宗教」、「ジェンダー」といった人間集団を生み出すと同時に、それぞれを差異づけ、時には鋭く対立させる装置に焦点を据え、個々の人間の身体に刻み込まれた社会を考察し、現代社会の様々な問題に批判的な眼差しを投ずることを目指しています。

本領域ではこうした問題意識を純然たる「理論」の次元で検討するのではなく、できるだけ具体的な事象の相のもとで、また、生きた現実と理論との相互交換関係の中で捉えてゆこうと考えています。具体的にいえば、大文字の「社会」一般を考えるのではなく、日本を含めた「アジア」世界にみられる多種多様な社会を通じて検討していくことになります。

ただし、ここでいう「アジア」とは「ヨーロッパ」や「日本」と切り離された実体として考えているわけではありません。むしろアジアをひとつの自律した世界として考えるのではなく、異質な諸力に貫かれつつ、他と接合された世界と捉え、日本を含めた各個別社会をより広い文脈の中で理解する参照枠として理解してゆこうというわけです。そもそもアジアという地域は自明で透明な存在では決してありません。「アジア」的なるものの来歴をつねに問いつつ、現代アジア諸地域の社会、文化、政治、経済、について複眼的な視点を獲得していってください。

一方、方法論の次元ではアジア世界の複雑な現実をつかみ取れるよう、現在から過去へ遡行する方法として歴史学の基本的な資料分析方法が、また生まれつつある歴史の記述法として、文化人類学の基本的方法であるフィールドワークが、本領域の二つの柱となっています。

さらに、科目編成はたんなる地域研究的視点を排し、現代に生きる我々が各自の思考の枠組みを広げ、現代のアクチュアルな課題に取り組めるよう、広範な主題を用意してあります。従って、学生諸君には自らの卒論に向けた研究方向にあわせて、各テーマを相互に有機的に関連づけながら、知見を切り拓いていってくれることを望みます。

## 2 1・2回生小集団教育

1回生時の「研究入門」と2回生時の「基礎講読」が該当します。配当された回生で必ず履修しなければなりません。

1回生時に全員が履修する「研究入門」では、テクスト、イメージ、フィールドといった人文総合科学の基本的な道具について初歩的に、かつ幅広く学び、2回生以降に知見と興味関心を広げてゆく基礎を築いてもらいます。ここでは、自分の関心を狭く限定するものではなく、人文総合科学インスティテュートの学生として、より広範な分野、テーマ、ものの見方に触れ、以後の着想力を高めるように努力することを期待しています。

2回生時の「基礎講読」は、文献のノート作成能力やプレゼンテーション能力などを訓練するトレーニングの場

であると同時に、領域だけに限定されない幅広い視野を養う場として設定してあります。いくつかのテーマ設定のもとで講読をおこなってゆきますので、様々な問題設定をなし得る基礎的能力を獲得し、３回生演習に向けて自らの卒論研究テーマを明確にするよう試みてください。

## 3 講義科目

１回生配当の「グローバルヒストリーⅠ」と「同Ⅱ」は、有機的連関をもったグローバルな視座から歴史像を提示する基礎科目であり、人類の歴史がどのような襞を織りなしながら展開し、現在に至るのかというマクロな視点から、「歴史人類」領域で必要とされる視点の涵養を目的のひとつにおいています。

これに対して「文化人類学Ⅰ」と「同Ⅱ」では、そうしたマクロな視点からは漏れ落ち、「歴史」を持ち得ないとされた人々を人類学がいかに発見していったのか、その歴史的経緯を振り返りつつ、現在を記述するための基本的な方法について学べるように設定してあります。

また、２回生以降の講義科目では、本領域のキーワードにあたる「エスニシティ」と「ジェンダー」をめぐって、それぞれ通年設定の講義科目が基幹科目として設定してあります（「エスニシティとネーションⅠ、Ⅱ」、および「ジェンダー・ポリティクス」と「ジェンダーと文化」）。これらの科目はセメスター単位で受講することも可能ですが本領域の学生諸君にはできるだけ通年受講を望みます。なお、もうひとつのキーワードである「宗教」については、特定の課目のかたちではなく、提供カリキュラムの全体で扱っていきますので、詳しくは履習モデルの欄をご参照ください。

３回生配当科目では、それぞれの個別問題に関するセメスター科目が配置されていますが、それ以外にも、具体的に卒論を仕上げるための方法論と関連して、歴史学については「史料が語る世界」、文化人類学については「フィールドワークⅠ」と「同Ⅱ」という科目を用意しています。これらの科目は皆さんが卒論に関連した調査研究を円滑に進められるように、その助走路を築くことを目的としたものであり、自身の研究方向に照らし合わせて、最低限、どちらかひとつは受講するようにしてみてください。

## 4 外書講読科目

２・３回生時には複数の言語による外書講読科目が用意されていますが、これは各領域と明確に対応しているわけではありません。むしろ皆さんの興味関心や語学力、さらに卒論に向けての研究方向に照らし合わせ、もっとも相応しい言語とテクストを自ら選択し、積極的に学習してみてください。

しかしながら、外書講読一般、とりわけ３回生時の外書講読はたんなる語学学習の場ではありません。何よりもそれは自らの問題を考え抜くために必要な資料を、日本語という限定された枠組みから解放し、外へ向かって広げるための最初のステップとして位置づけられています。したがって、ここでは外国語で書かれた資料を一定期間内に効率的に把握する技術を獲得するとともに、そのテクストと関連する多岐的な文献を使いこなす柔軟な姿勢を習得できるよう努力してみてください。

## 5 卒業論文

卒業論文の具体的指導は「演習Ⅱ」でおこないます。しかし、卒論に向けた研究作業はすでに２回生時から始まっているといっても過言ではありません。卒業論文とはいうまでもなく四年間にわたる自らの問題意識をひとつの論文のかたちにまとめ上げた総決算ほかならず、そのためには長い時間をかけて基礎的能力（文献読解能力や語学力、発表技術など）を養うと同時に、幅広い視野と大胆で柔軟な着想力を獲得することが肝要となってきます。具体的にいえば、卒論のテーマはその骨子を３回生終了時には明確に決定し、４回生当初からすぐに執筆に取りかかれるよう、必要な実地調査や文献資料の収集に取り組んでみてください。

# 研　究　入　門　の　栞

## Ⅰ．学際プログラムにおける研究入門

研究入門は、文学部に入学した新入生が全員受講することになる、クラスを単位とした小集団科目です。人文総合科学インスティテュート学際プログラムでは、以下に説明する入門講義とするプレゼンテーションを軸に、研究入門を運営していきます。

### （1）入門講義

研究入門を構成するコンテンツ（内容）の第一は、入門講義です。

ここでは、3領域から選ばれた6名の教員が、前後期を通じて数時間ずつ全3クラスの講義を分担し（これにより6サイクルの講義が生まれる）、それぞれ自身の選考する学問領域について概要を論じます。また、それぞれのサイクル終了時に、講義の内容をうけたレポートが課されます。

これらの講義は相互に無関係のものではなく、前後期の講義を通じて「解釈と翻訳」という共通テーマのもとに設定されており、それぞれテクスト、イメージ、フィールドという3つの素材のもとにアプローチを試みます。この3つのアプローチによる入門講義と課題の意義は、特定の学問領域や入学時に選んだ仮領域のみに固執することなく、学際プログラムとして共通の学びのスキルを獲得することにあります。

ですから、本入門講義は、3回生に進級する際に領域を確定するにあたっても、重要な参考となりえます（入学時に仮所属領域とは異なった領域に所属したい場合は、所定の手続きが必要です）。

### （2）プレゼンテーション

研究入門を構成する第二のコンテンツ（内容）は、受講者が主体的に行うプレゼンテーション（発表）です。研究入門においてプレゼンテーションを重視する意義は、以下の3点を受講生に実践、習得していってもらうことにあります。

①グループワーク：プレゼンの準備および実施にあたって問われるのは、グループメンバー各人が発揮する主体性のみならず、相互に意見を調整し協調して、全体の構成をまとめあげ、プレゼンを成功させることです。

②表現のスキル：プレゼンを成功に導く鍵は、レジュメの作成法や、さまざまな発表支援ツールの使用法などを習得し、自らの研究成果を効率的かつわかりやすく伝えることです。

③相互的学びの場：プレゼンとは、発表する側とともに、聞く側の能動的な参加姿勢によって、はじめて成功するものです。発表内容のポイントをついた質問や、そこから議論を展開させていくことを通じて、自己の学びへとフィールドバックされうるのです。

## Ⅱ．研究入門スケジュール

研究入門の具体的な運営は、年度最初の授業で配布されるスケジュール表を参照してください。授業最初のガイダンスにおいて、入門講義とプレゼンテーションの具体的な運営方針が説明されます。

レポート課題の提出等については、清心館3Fの学際プログラム共同研究室が窓口となります。グループワーク作業時には、この共同研究室を積極的に活用してください。そこでは、助手またはTA（ティーチング・アシスタント）から、グループワークのアドヴァイス等を受けることができます。

# 卒　業　論　文　の　栞

**人文総合科学インスティテュート「卒業論文」の体裁について**

| | | 「人間と情報」領域 | 「人間と情報」以外の領域 |
|---|---|---|---|
| 原稿用紙に手書きする場合 | | A４横書レポート用紙（縦長）<br>（１行30文字、１頁20行程度） | A４判「立命館大学論文用紙」（縦長） |
| | 縦書・横書の指定 | 横書 | 横書 |
| | 枚数 | 400字原稿用紙換算で20枚以上50枚以下 | 20枚以上50枚以下 |
| | その他の注意 | 黒または青のペンを使用すること。 | |
| ワープロを使う場合 | | A4判白紙（縦長） | |
| | 縦書・横書の指定 | 横書 | |
| | 文字数に関する指定 | １行あたりの文字数：指定なし　１頁あたりの行数：指定なし | |
| | 枚数等に関する指定 | 400字原稿用紙換算で20枚以上50枚以下 | |
| | その他の注意 | 上下左右のマージンが２～３cm<br>１頁あたりの文字数が1,000～1,200字<br>文字は12ポイント程度の大きさで、明朝,ゴシックなどの一般的なフォントを使うこと。 | |
| 表紙等に関する体裁 | | フラットファイル（色指定なし） | フラットファイル（色指定なし） |
| | 大きさ | A４ | A４ |
| | 綴じ辺 | 長辺綴じ（左辺綴じ） | 短辺綴じ（上辺綴じ）又は長辺綴じ（左辺綴じ） |
| | 題目シール | 指定なし　表紙に題目、学生証番号、氏名を所定の方法で記入 | |
| 部　　数 | | ３部作成し、２部を提出する。（１部は本人手元保存） | |

## 「卒業論文」の提出について

◆**「2005年度卒業論文」**の提出締切期限は、

**12月20日（火）午後５時**とします。＜時間厳守＞

※　提出の際は、学生証が必要です。
※　必ず本人が持参してください。事前許可なしで代理提出はできません。
※　締切時間は厳守してください。遅延提出は一切認められません。
※　卒業論文の提出の形式が整っていないと受理できないケースもありますので、万端に準備してください。
※　**単なる体調不良や交通機関の延着・機器等の故障・勤務の都合等の理由での提出遅延は、認められません。**余裕を持って提出できるように心がけください。
※　予測不可能かつ緊急の事態などで、どうしても締め切り前の提出が困難になった場合、**自分で判断せず、必ず事前に文学部事務室に一報**してください。事前連絡・相談があったケースに関してのみ、本人申請書・証明書類を提出の上、教授会の審議を受けた上で提出の延期を許可する場合があります。（全てが許可されるとは限りません。）事前連絡と必要な書類手続の両方が満たされていることが大前提です。事前の連絡がない場合は、事後の対応が不可能になります。

◇「卒業論文」の提出前に、**「卒業論文題目届」**を文学部事務室に提出することが必要です。「卒業論文題目届」の提出締め切り期限は、

**10月６日（木）午後５時**とします。

◆**論文審査の主査・副査の発表は、10月下旬から11月上旬**とします。各専攻・プログラム共同研究

室掲示板に掲示します。

◇**口頭試問の日程は、１月下旬から２月中旬**に行います。個人別の日時は、１月中旬頃に各専攻・プログラム共同研究室掲示板に掲示します。

※　卒業旅行の日程は、口頭試問を避けてください。

◆卒業論文の形式は、各専攻・プログラムにより異なりますが、以下の形式は共通ですので、必ず守ってください。

①　卒業論文は、添付資料なども含め、必ず**２部**提出してください。

②　表紙に論題、氏名、学生証番号などを記載してください。

| |
|---|
| 2005年度卒業論文<br>「○○　・・・・・・　　(論題)」<br>　学生証番号、氏名 |

③　論題は、事務室に提出した「卒業論文題目届」と全く同一でなければなりません。卒業論文作成中に論題の変更が必要となれば、主査・副査の変更がないか必ず指導教員に確認した上で、事務室で論題変更の手続きを行ってください。テーマ自体が変わるなど、大きな変更は認められません。

④　主査・副査の名前を記した紙（シールになっています）を、おもて表紙の裏側に貼り付けてください（２部とも)。「主査・副査シール」は文学部事務室で配付しています。主査・副査は10月下旬から11月上旬に共同研究室の掲示板に掲示されていますので、早めに確認してください。

⑤　体裁については各専攻の「教学の手引き」に従って作成してください。(専攻によっては体裁の変更指示もあるため、各専攻掲示を確認してください。)
体裁については、各専攻で点検します。したがって、窓口・提出会場で受け付けられた論文でも、専攻で体裁上の不備が発見された場合は、口頭試問の時点でF評価となることがありますので、注意してください。

**2005年度後期　卒業論文に関する日程**

| 日　　程 | 内　　容 |
|---|---|
| 10月６日(木)午後５時まで | 「卒業論文題目届」事務室提出締め切り |
| 10月下旬～11月上旬 | 主査・副査発表（共同研究室掲示板） |
| 11月28日(月)～12月５日(月) | 題目変更期間 |
| 12月13日(火) | 卒業論文受付開始 |
| 12月20日(火)午後５時まで | 卒業論文提出締め切り　＜時間厳守＞ |
| １月中旬頃 | 口頭試問日程発表（共同研究室掲示板） |
| １月下旬～２月中旬 | 口頭試問実施 |

◎５回生以上の学生で、前期に卒業論文を提出する方の日程

| 日　　程 | 内　　容 |
|---|---|
| ４月28日(木)午後５時まで | 「卒業論文題目届」事務室提出締め切り |
| ７月１日(金)～７月８日(金) | 題目変更期間 |
| ７月13日(水) | 卒業論文受付開始 |
| ７月20日(水)午後５時まで | 卒業論文提出締め切り　＜時間厳守＞ |
| ７月下旬～８月 | 口頭試問はこの間に実施します。日程は７月下旬に各専攻・プログラムの共同研究室掲示板に掲示します。 |

## テーマリサーチ型ゼミナールで卒業論文（非卒業論文形式含む）を提出するには

テーマリサーチ型ゼミナール受講学生の皆さんは、従来のような卒業論文提出の形態（卒論形式）もあり得ます

が、クラスによっては、そこで制作する卒業論文は従来の専攻のような論文形態によらず、共同で成果物（本の出版等）を仕上げてこれを卒業論文とすることができるという形態（非卒論形式）も認められています。提出期日・提出先・提出方法については、卒論形式か非卒論形式かによって取り扱いが異なります。必ずクラス内で担当教員に、いずれの形式なのかを確認してから作成してください。※卒論形式・非卒論形式いずれの場合も「卒業論文・卒業制作テーマ届」（←卒論形式・非卒論形式共通）は全員提出してください。

**「卒業論文・卒業制作テーマ届」事務室提出締め切り：10月６日（木）午後５時まで**

**テーマ届変更期間：11月28日（月）～12月５日（月）**

**体裁について**

| | | |
|---|---|---|
| 卒論形式で制作の場合 | 文書体裁 | 字数・書式・用紙の大きさなどはクラス担当者の指示に従うこと |
| | 表紙等に関する体裁 | 題目、学生証番号、氏名を必ず記載すること |
| | その他注意 | １．学生本人のみの執筆による単著であること。共同執筆の類は該当しない。<br>２．主査・副査の発表・口頭試問日程等は担当者の指示に従ってください<br>３．提出締め切り等の詳細は「テーマリサーチ型ゼミナール・卒論形式で提出する方」を参照してください。 |
| 非卒論形式で制作の場合 | 文書・表紙体裁 | 体裁については全てクラス担当者の指示に従うこと |
| | その他注意 | １．制作物（成果物）の提出が不要の場合であっても卒業論文・卒業制作テーマ届を所定の期日までに文学部事務室へ提出してください。<br>２．制作物（成果物）の提出が必要な場合、提出期日・提出先・提出方法などは担当教員の指示に従ってください。<br>３．口頭試問に相当するものとして、「卒業制作発表会（仮）」を実施することがあります。実施日については、担当教員の指示に従ってください。 |

## テーマリサーチ型ゼミナール「卒論形式」で提出をされる方の提出について

提出に際する諸注意は基本的に前述の「卒業論文」の提出についてに従ってください。ただし、以下点が異なりますので留意してください。

①TRSのばあい、「卒業論文題目届」ではなく、「卒業論文・卒業制作テーマ届」の提出が必要です。

②論文審査の主査・副査の発表日程は授業内にて指示します。

③口頭試問の日程は基本的に１月下旬～２月中旬に行う予定ですが、個人別の日時等は授業内にてお知らせしますので、クラス担当教員の指示に従ってください。文学部共同研究室掲示板に掲示することもあります。

| 日　　程 | 内　　容 |
|---|---|
| 10月６日（木）午後５時まで | 「卒業論文・卒業制作テーマ届」事務室提出締め切り |
| 10月下旬～11月上旬 | 主査・副査発表（担当教員による指示） |
| 11月28日（月）～12月５日（月） | 題目変更期間 |
| 12月13日（火） | 卒業論文受付開始 |
| 12月20日（火）午後５時まで | 卒業論文提出締め切り　＜時間厳守＞ |
| １月中旬頃 | 口頭試問日程発表（担当教員による指示） |
| １月下旬～２月中旬 | 口頭試問実施 |

◎５回生以上の学生で、前期に卒業論文を提出する方の日程

| 日　　程 | 内　　容 |
|---|---|
| ４月28日（木）午後５時まで | 「卒業論文・卒業制作テーマ届」事務室提出締め切り |
| ７月１日（金）～７月８日（金） | 題目変更期間 |
| ７月13日（水） | 卒業論文受付開始 |
| ７月20日（水）午後５時まで | 卒業論文提出締め切り　＜時間厳守＞ |
| ７月下旬～８月 | 口頭試問はこの間に実施します。日程は各担当教員に確認してください。 |

# 目　　次

卒業論文の提出について

1　体裁と手続き――最低限これだけはクリアしないと受理もされません
1-1　用紙／書式／分量（字数の制限）1
1-2　構成――うち表紙、要約、目次、本文、注、参考文献、資料
1-3　綴じ方（ファイル、おもて表紙の表記、etc.）
1-4　題目の届け出
1-5　提出
1-6　口頭試問

コラム――「共同研究室より」
2　文献表記のきまり――少しカタチにこだわってみる
2-1　「人間と情報」領域の注と文献表記
2-2　その他の領域の注と文献表記

3　卒業論文を書く意味

## 1　体裁と手続き―最低限これだけはクリアしないと受理もされません

この栞〔しおり〕は、卒業論文を執筆・提出しようとするインスティテュート生のために、初歩的かつ不可欠な形式的条件を中心に整理した手引きです。

この第1節ではまず、「体裁」と「手続き」について説明します。

使用する用紙・書式・構成などに係る指定や、題目の届け出（10月）と最終提出（12月）に係る手続きは、これだけはクリアしないと卒業論文として受領されない必要最低条件ですから、いずれについても遺漏のないよう心がけてください。（体裁については、共同研究室にサンプルが用意されていますので、それを参考にしてください。）

### 1-1　用紙／書式／字数の制限

#### 1-1-1　用紙

A４版の用紙の片面のみ、縦位置、横書きで使用することを基本とします。

論文のテーマが縦書きを要請する場合は、個別に指導教員の指導を受けてください。

#### 1-1-2　書式

細かな書式は、手書きの場合（1-1-2-1）と、ワープロを使用する場合（1-1-2-2）で、以下のように異なりますが、いずれの場合も、各頁の下部に頁番号（全体中の一連番号*）を付さねばなりません。

（＊頁番号は、「人間と情報」領域の場合、3-5［第３章の第５頁の意］のように記載してもかまいません。）

#### 1-1-2-1a　原稿用紙を使用する場合（「人間と情報」以外の領域）

400字詰めの立命館大学論文用紙（生協で取り扱っている）に、黒もしくは青のペンをもちいて清書します。（鉛筆書きの場合は濃い字で書いたものの鮮明なコピーしか認められません。）

#### 1-1-2-1b　レポート用紙を使用する場合（「人間と情報」領域）

横書きのレポート用紙に、黒もしくは青のペンをもちいて書きます。1行30文字、1頁につき20行程度を、目安にしてください。

#### 1-1-2-2　ワープロを使用する場合（全領域共通）

上下左右ともに2～3cmの余白をとります。字の大きさは12ポイント程度、フォントは（特別な理由がないかぎり）明朝かゴチックなどの一般的なものがのぞましいでしょう。これで１行の字数は35字～40字、頁の行数を30行程度とすれば、１枚あたりの字数が1000～1200字程度となります。これ以上でも以下でも推奨できません。

なお、感熱紙は変色のおそれがあるので、コピーをとったものを提出してください。

### 1-1-3　字数の制限

本文（注を含まない）の分量については、400字詰め原稿用紙換算で20枚以上、50枚以下という上下限を設けています。

ワープロを使用する場合も、400字詰め原稿用紙に換算してその字数制限を守る必要があります。（それが守られていることの目安として、本文末に以下の記載を加えるようにしてください――すなわち、字数のカウントが可能なワープロ・ソフトの場合はその表示された字数を、カウント機能のないワープロ・ソフトの場合は［１行の字数×行数＝空白も含めた合計字数］の計算式を、それぞれ最終行のカッコ（　）内に記します。）

なお、場合によってはこの上下限の制約が緩められることもありますので、主としてこれを超える量の執筆が見込まれるようなら、個別かつ事前に指導教員に相談してください。

## 1-2 構成

ファイルとして綴じられた論文（綴じ方は次項［1-3］を参照）の中味は、――

うち表紙
要約
目次
本文
注（＊）
参考文献
付録・資料等

――の順で構成されます。（後述しますが［1-3］、こうして構成され綴じられた同一の論文を３部作成しなければなりません。）

なお、これらのうち、第2節で詳論する「注」および「参考文献」の以外の項にかんする注意事項は、以下のとおりです。

（＊「人間と情報」領域では注はつけません。どうしても必要な場合に限り、脚注として該当ページの下部に記載します。また、参考文献と引用文献を区別していないなら参考文献で統一し、区別しているなら併記します。）

### 1-2-1　うち表紙

ファイルのおもて表紙［1-3-2］に準じるものを、うち表紙として第1頁におきます。具体的には、――

「2005年度卒業論文」の表記
論文題目（副題がある場合は改行して記載）
学生証番号
氏名

――が明記されている必要があります。

### 1-2-2　要約

400字詰め原稿用紙にして２～３枚の量で、論文の本文を要約します。

### 1-2-3　目次

本項で触れる要約から資料等にいたる項目に加え、本文については章（あるいは節）にいたるまでの構成も記して、それらすべての項目に、頁番号を記します。

### 1-2-4　本文

第1章、第2章、…と複数の章をもって構成し、論理的に論述を進める必要があります。

また、それら複数章による部分を本論とした枠の部分に「序」（あるいは「はじめに」）と「結」（あるいは「おわりに」）をおいて、問題の所在（前者）や今後の展望（後者）を記すのもよいでしょう。

さらに本論も、章のみでなく、階層構造を意識した部・章・節の区分を設けることも、可能ですし、ときに必要ですらあるでしょう。

いずれにしても、本文の構成は考察の内容と不可分の関係にあるものですから、教員の指導を受けながら慎重に決定することが重要です。

**［1-2-5の項として扱われるべき「注」については、第2節に詳述］**

**［1-2-6の項として扱われるべき「参考文献」については、第2節に詳述］**

### 1-2-7　図表・資料等

「人間と情報」領域については、実験の結果や分析は文章で記述します。そのさい、図表を用いて分かりやすくなるよう心がけてください。ただし、「結果は表に示す」といった、説明文がないものは、認められません。

なお図表は、一連番号を付しそれぞれ簡潔なタイトルや説明もつけたうえで、本文中の参照している位置に貼り込むか、独立した頁にして本文中に綴じ込みます。単位などを忘れないことはもちろんですが、線も実線、鎖線、一点鎖線などを用い、多色による区別は避けるようにします（特別な理由がないかぎりモノクロで出力します）。

また、領域を問わず、論文に添付される資料類がファイルに綴じるのに適さない量や大きさを有する場合は、前もって指導教員の指示を仰いでください。

## 1-3　綴じ方（ファイル、おもて表紙の表記、etc.）

以下の条件に沿ったサンプルを共同研究室に用意していますので、参考にしてください［この第1節のあとのコラムも参照］。

### 1-3-1　綴じ方

上の1-2の項の説明にそって構成された中味を、A4版フラットファイル（生協で取り扱っている）で綴じます。この同一のものを3部作成しますが［1-5も参照］、ファイルの色は教員の指示にしたがってください。

### 1-3-2　おもて表紙

うち表紙［1-2-1］と同様、――

「2005年度卒業論文」の表記
論文題目（副題がある場合は改行して記載）
学生証番号
氏名

――の情報を明記します。手書きはワープロによった別紙を貼り込んでもかまいません。

### 1-3-3　表紙裏

主査・副査の教員名を記したシール（11月頃から事務室で入手できる）を貼ります。

ただしこの教員名は自由に選べるのではなく、10月の題名届け出を受けて決定され、11月に共同研究室前に掲出されるものを、正確に記載しなければなりません［1-4を参照］。

### 1-3-4　背表紙

ファイルの背表紙にも、年度、題目、氏名を記します。

### 1-4-1　題目の届け出

「卒業論文題目届」が所定の締切以前に届け出られている必要があるのはいうまでもありませんが、指導教員との事前の打ち合わせもそれにおとらず重要です。（当然すぎて、あえて理由を記すまでもないほどですが、次項に記す主査・副査の確定作業に支障をきたす可能性のことを付記しておきます。）

### 1-4-2　主査・副査の確定

上記の届け出をうけた論文審査の主査・副査は、11月上旬に共同研究室前の掲示板に掲出されます。論文提出時には、ファイル表紙裏のシールに正確にその教員名を記してください［1-3-3を参照］。

### 1-4-3　題目の変更

題目を届け出たあとのその変更は望ましくはありませんが、やむをえない場合のために、提出が近づいた11月末から12月初旬にかけて変更を受けつける特別な期間（別途掲示）が設けられています。論文の最終的な形態について指導教員と十分相談したうえで、期間内に手続きを済ませてください。

## 1-5　提出

提出締切は厳守するように。（受け付け期間は約2週間あります。そんなに余裕をもって完成はさせられないにせよ、自身で早めの締切を想定して作業を進めるくらいで、むしろちょうどよいでしょう。）交通機関の遅延、ワープロやプリンタの故障など、いかなる事情によっても締切後は受理されません。

なお、3部作成した同一の論文のうち、実際に提出・受理されるのは2部で、残りの1部は執筆者であるあなたの手元に残ることになります（＊）。1月下旬から2月中旬の試問［1-6］に向けて自身で再度それを読み直し、また試問時にはそれを持参するようにしてください。

（＊原稿用紙を使用する場合は、原版1部とコピー2部で計3部とし、このうち原版1部とコピー1部を提出します。）

### 1-6　口頭試問

論文を提出しても、１月下旬から２月中旬に実施される口頭試問を受けないと単位認定されません（卒業できません）。試問の日時・場所は、１月中旬に共同研究室前の掲示板に掲出されます。

**コラム――「共同研究室より」**

●清心館３Fの共同研究室には、決められた時間帯に助手およびTA（ティーチング・アシスタント）が詰めるようになっています。皆、卒業論文のハードルをクリアした経験の持ち主ですから、不明な点があれば相談してもらってもいいでしょう。ただし、アドバイスできることがあるとしても、教員による指導に直接代わるものではありませんから、その点を留意し、また基本的にこの「栞」に当たって調べることを先行させてください。

●本文中にも記したとおり［1-3］、共同研究室には、最低限の体裁を整えたサンプルが用意されています。実際に手にとって、不明点の解消に役立ててください。

●共同研究室内には数台のパソコン等が設置され、学生諸君の日々の利用に供されていますが、卒業論文提出間近になると利用希望者で混雑するなどして、逆にさまざまな不具合を発生させかねません。そこで、12月に入ると使用規制を敷き、それら機材の利用に制限をもうけることにしています（実験実習室でも同様です）。逆に提出前には卒業論文執筆専用となる学内スペースもありますから、それらを有効に利用するなどして対処してください。また、２穴パンチなどの文具はその使用規制の対象となりませんので、随時利用してかまいません。

## 2.　文献表記のきまり――もう少しカタチにこだわってみる

この第２節では、文献の引用やその書誌情報の掲出にあたっての形式的要求（統一や慣例の踏襲など）について触れます。

論文がいわゆる創作やエッセイと異なるゆえんは、何よりもそれが**先行研究の渉猟・整理・読解・批判**の作業のうえにたつ点に尽きます。

この書誌情報の表記の仕方は、研究領域ごとにそれぞれに慣例があるものですし（きわめて厳格にそれを守ることを求める領域もあればそうでない領域もあります）、それ以上に、自身が依拠する方法で一貫した記述がなされていることが肝要です。

さて、複数の学問領域〔ディシプリン〕の混成体としてあるインスティテュートとしては、それら領域ごとに微妙に異なる表記法のすべてを網羅できるものではなく、あくまで最大公約数的なものを紹介しうるのみなのですが、以下では、まず最初に、他の領域とやや異なった慣例を有する「人間と情報」領域の表記法にふれ、ついで、人文系諸領域で比較的汎用的にもちいられる表記法について紹介します。

ここに記されることがらを最低限踏まえたうえで指導教員の個別のチェックを受けることを、あらかじめ推奨しておきます。

### 2-1　「人間と情報」領域の注と文献表記

#### 2-1-1　本文中での文献の利用

本文中で文献を引用するときは、引用文の後に（Luria, 1996）のように著者の姓および出版年をカッコに入れて書きます。

本文中に直接、著者名を記入するときは、「Luria（1966）によれば…」というように著者名の直後に出版年のみをカッコに入れて書きます。

また、引用文献が２人の共著の場合は、引用のたびに両著者の姓を書きます。著者が３人以上の場合は、初出の際には全著者の姓を書き、２度目以降は第１著者の姓のみ、（田中他, 1989）や（Smith et al., 1980）のように表記します。

#### 2-1-2　引用文献の文献一覧中の表記法

以下では、引用する文献の種類（単行本、編集書・監修書、編集書・監修書の１章、翻訳書、逐次刊行物、学会発表論集）の別に、記載要領をカッコ（　）内に記したうえで、その実例を示しますが、実際の論文では、日本語文献・外国語文献や単行本・論文の区別をせず、著者の姓によりアルファベット順に配列してください。

同一著者の文献が複数ある場合は、刊行年の早いものから順に並べ、さらに同一年に刊行されたものがい

くつかある場合は、年次を示す数字の直後にアルファベットの小文字a、b、…を付して区別してください。
（イタリック体（斜字）で表記している部分（書名）は、手書きの場合は、下線を引くことで代替します。）

**2-1-2-1　単行本（著者名、発表年、書名、出版社、の順に、間に空白をはさみながら記します）**

南博　1980　人間行動学　岩波書店

Gibson, E. J. 1969 Principles of perceptual learning and development. New York: Appleton-Century-Crofts.

**2-1-2-2　編集書・監修書（上とほぼ同様ですが、著者名の代わりに編著者・監修者名が明記されます）**

高木貞二（編）　1958　心理学研究法　岩波書店

Dunnete, M. D. (Ed.) 1976 Handbook of industrial and organization psychology. Chicago: Rand McNally.

**2-1-2-3　編集書・監修書の1章（書物としての情報の前に、その1章にかんする情報を記します）**

森敏明　1985　記憶のモデル論　小谷津孝明（編）　認知心理学講座2　記憶と知識　東京大学出版会 35-58.

Berlyne, D. E. 1969 The reward-value of indifferent stimulation. In J. T. Tapp (Ed.), Reinforcement and behavior. New York: Academic Press. 179-214.

**2-1-2-4　翻訳書（単行本と同様ですが、著者名と発行年の間に翻訳者が記されます）**

ヘップ D. O.　白井常・鹿取広人・平野俊二・金城辰夫・今村護郎（訳）　1975　行動学入門　紀伊国屋書店

Helmholtz, H. von 1925 Treatise on physiological optics. Vol. 3. (Trs. & ed. by J. P. C. southall) New York: The Optical Society of America. (Handbuch der psysiollogisten Optik. 3. Aufl., 3, Bd. 1910 Hamburg: Leopold Voss.)

**2-1-2-5　逐次刊行物に掲載された論文（執筆者、刊行年、論文名、刊行物名、号と頁数の順に記載）**

中島誠　1967　日本における言語発達研究の動向　心理学評論　10, 257-278.

Underwood, B. J. 1976 Recognition memory for pairs of words as a function of associative context. Journal of Experimental Psychology: Human Learning and Memory, 2, 404-412.

**2-1-2-6　学会発表論集（上にほぼ準じます）**

畠瀬稔　1980　エンカウンター・グループ経験による教師の対人能力の促進に関する研究　日本心理学会第44回大会発表論文集, 642.

**2 - 1 - 3　間接引用**

間接引用は好ましくありません。原典に当たることを心がけるべきですが、それでも、原典がどうしても入手できず、やむをえない場合は、間接引用に当たって依拠する文献を明らかにしなければなりません（たとえば、「佐藤（1989）によれば、Skinner（1971）は…」というように）。

**2 - 2　その他の領域の注と文献表記**

その他の 4 領域についても、「人間と情報」領域のような、参考文献一覧の表記をもとに注では略記法で済ませる方法をとるもことも、あながち不適当ではありません。が、実際には、参考文献一覧と別に、注は注として詳細な書誌情報を掲出することが、いまだ一般的なようです。

ここでは、まさにその一般的な方法を記しますが、慣例も異なる領域間に、あくまで最大公約数的に設定できるものとならざるをえませんので、細かな点については、あくまで指導教員の指示を優先させてください。（また、参考文献一覧の表記を注のそれと若干違える場合もありますが、それも各指導教員の裁量にまかせます。）

**2 - 2 - 1　文献表記例**

まず邦語単行本について書けば、著者名、書名、出版社、刊行年の順に表記しますが、書名は2重鍵カッコ『 』でくくるのが一般的です。他方、論文名等はふつうの鍵カッコ「 」でくくります。

他方、外国語文献の場合は、書名はイタリック体（斜字）で表記し（手書きの場合は下線を引いて代替します）、論文名などは鍵カッコ　“　”　でくくります（使用する言語によっては他の慣例による場合もあるので、該当する言語で書かれた論文における表記を参考にし、また教員の指導・チェックを受けるようにしてください）。

出版社（外国語文献の場合は出版地も表記する）と刊行年は、ひとまとめにカッコ（ ）でくくることもあります（ここではその表記を紹介します）。

その他、発表される媒体の種類によって表記に係る細かな慣例がありますが、その教授については各

領域・各指導教員の責任とし（それを学びチェックを受ける責任は諸君に発生します）、ここでは、外国語文献、雑誌論文、外国の展覧会カタログなど、いくつか例示するにとどめます。

［例］

川田順造『無文字社会の歴史』（岩波書店、1974年） p. 105.

V・クラパンザーノ（大塚和夫・渡辺重行訳）『精霊と結婚した男』（紀伊国屋書店、1991年） p. 350.

大貫妙子「ナショナリズムという病」（『現代思想』21巻5号、1993年） pp. 94-104.

徳永恂「フランクフルト学派と反ユダヤ主義研究」（小岸昭／池田浩士／鵜飼哲／和田忠彦編『ファシズムの創造力――歴史と記憶の比較文化論的研究』人文書院、1979年、所収） pp. 473-495.

Henri Zerner, *The Graphic Art of Roy Lichtenstein, exhibition catalog, Cambridge*: Fogg Art Museum, 1975, p. 30.

David Deitcher, "Lichtenstein's Expressionist Takes," *Art in America*, no. 71 1983, pp. 84-89.

**2-2-2　既出文献をふたたび注記する場合の略号**

**2-2-2-1　直前の注に記されているものの場合（「同書」や「Ibid」の表記をもちいます）**

同書, p. 230.

Ibid., p. 30.

**2-2-2-2　既出部分との間に別の文献が注記されている場合（「前掲書」や「op. cit.」の表記をもちいます）**

大貫, 前掲書, p. 95.

Zerner, op. cit., p. 30.

**2-2-3　間接引用**

間接引用は好ましくありません。原典に当たることを心がけるべきですが、それでも、原典がどうしても入手できず、やむをえない場合は、間接引用に当たって依拠する文献を明らかにしなければなりません。

## 3　卒業論文を書く意味

さて、先行研究のうえに立って進められる考察が、（いきなり後続の研究者によって参照される大論文にはならないまでも）後輩の卒業論文執筆の見本となるには、さらに、論述が論理的整合性を有し、かつまた既存の研究に何らかの知見（初学者なりの）をもたらすものである、といった、体裁・形式の問題を超えたプラスアルファの要素＝内容が求められます。

けれどもそういった問題こそは、それぞれの演習〔ゼミ〕の現場で各指導教員の責任において教授されることがら――。そこでここでは、なぜ卒業論文を書くのか、の総論的内容を記して、この栞のまとめとしておきます。

＊

卒業論文は、あなたがひとつの主題について自分の考えをまとめ、他人の評価を求めるたいへん重要な機会として課されています。論文の作成は4年間の大学生活の集大成であることはもちろんですが、文章をつうじて他者の評価をまつという、社会生活を送るうえでもっとも基本的な活動の、その最初の本格的な試みとなるのです。

一定の時間のなかで、自分自身の主題を見つけ、資料を集め、分析し、文章化し、繰り返し読んで手を入れ、そして完成するという過程は、各種の講読、実験、演習などによって身につけてきたはずです。卒業論文では、自分を凝縮して文章に盛り込んでゆくこの作業を、今まで以上に集中して、高い密度でおこなうことが求められます。

しかもその主題設定においては一定の独創性を、資料収集においては個性的な視点を、分析においては鋭さを、文章においては読み手を引き込む説得力を、求められます。そしてこうした要件こそは、どのようなかたちであれ、あなたが社会に出て自らの主張を文章をつうじておこなう上でも求められる要件に、ほかならないのです。

＊

最後にくりかえします――この栞に記される事柄は、インスティテュート教員が最低限必要と合意した標準的な内容ばかりですが、個別の論文の内容がここからの逸脱を要求する場合もあるかもしれませんし、逆に指導教員がすすんで特別の指示をあたえる場合もあるでしょう。

極端な話、ここにシロと書かれてあっても指導教員がクロといえばクロである、というくらいに、じっさいのゼミの内容を重視し、本冊子はあくまでも補足的なものであると了解してください。

# Ⅱ

# 履修方法とユニットプログラム　履修モデル

# 1 科目一覧

## 学際プログラム１～３回生

| 分　野 | 科　目　名 | 配当回生 |
|---|---|---|
| 講　読 | ＃人文総合科学外書講読Ⅰ・Ⅱ（各２） | 2 |
| | ＃人文総合科学外書講読Ⅲ・Ⅳ（各２） | 3 |
| 小 集 団 | ＊人文総合科学研究入門（４） | 1のみ（通年） |
| | ＃人文総合科学基礎講読（４） | 2のみ（通年） |
| | ＃人文総合科学演習Ⅰ（４） | 3のみ（通年） |
| | ＃人文総合科学演習Ⅱ（４） | ４（通年） |
| | ＊卒業論文（４） | ４（通年） |
| 言語文化 | 比較文化論Ⅰ・Ⅱ（各２） | 1 |
| | ヨーロッパ文化史Ⅰ・Ⅱ（各２） | 2 |
| | 文化と文化批判Ⅰ・Ⅱ（各２） | 2 |
| | 文化とポストコロニアル批評Ⅰ・Ⅱ（各２） | 2 |
| | 社会思想史（２） | 2 |
| | 世界の言語（４） | ２（通年） |
| | 比較文学特論Ⅰ・Ⅱ（各２） | 3 |
| | ヨーロッパ文学史Ⅰ～Ⅲ（各２） | 3 |
| 芸術表象 | 映像原論（２） | 1 |
| | 民族と文明の美術史（２） | 1 |
| | ヨーロッパの美術・デザイン（２） | 2 |
| | オリエント美術史（２） | 2 |
| | 仏教美術史（２） | 2 |
| | 日本絵画史（２） | 2 |
| | 西洋近代美術史（２） | 2 |
| | 現代美術論（２） | 2 |
| | 美学・芸術社会学（２） | 2 |
| | 映画史（２） | 2 |
| | 芸術とメディア（２） | 3 |
| | 映像と社会（２） | 3 |
| | 民族と芸術（２） | 3 |
| | 京都の美術（２） | 3 |
| 歴史人類 | グローバルヒストリーⅠ・Ⅱ（各２） | 1 |
| | 文化人類学Ⅰ・Ⅱ（各２） | 1 |
| | 近現代の諸相（２） | 2 |
| | 人間と宗教（２） | 2 |
| | エスニシティとネーションⅠ・Ⅱ（各２） | 2 |
| | 社会構造と文化（２） | 2 |
| | アジアとテクノロジー（２） | 2 |
| | 人間と環境（２） | 2 |
| | ジェンダー・ポリティクス（２） | 3 |
| | ジェンダーと文化（２） | 3 |
| | 歴史人類学の諸問題（２） | 3 |
| | 地域と移動（２） | 3 |
| | 都市と農村（２） | 3 |
| | 他者認識の歴史（２） | 3 |
| | 歴史認識・叙述の諸問題（２） | 3 |
| | 民族誌の諸問題（２） | 3 |
| | フィールドワークⅠ・Ⅱ（各２） | 3 |
| | 史料が語る世界（２） | 3 |

*1．科目名のカッコ内数字は単位数を示します。*
*2．＊のついた科目は、人文総合科学インスティテュート学生のみが受講できます。*
*3．＃のついた科目は、重複受講ができます。*
*4．下線のついた科目は、その回生しか受講できません。*

## 学際プログラム４回生、インスティテュート４領域５回生

| 分野 | | 科目名 | 配当回生 |
|---|---|---|---|
| 各領域共通 | 講読 | ＃人文総合科学外書講読Ⅰ・Ⅱ（各２） | 2 |
| | | ＃人文総合科学外書講読Ⅲ・Ⅳ（各２） | 3 |
| | 小集団 | ＊人文総合科学研究入門（４） | １のみ（通年） |
| | | ＃人文総合科学基礎講読（４） | ２のみ（通年） |
| | | ＃人文総合科学演習Ⅰ（４） | ３のみ（通年） |
| | | ＃人文総合科学演習Ⅱ（４） | ４（通年） |
| | | ＊卒業論文（４） | ４（通年） |
| 言語と文化 | | 【比較文化概論Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 1 |
| | | 【比較文学概論Ⅰ・Ⅱ（各２】 | 2 |
| | | ヨーロッパ文化史Ⅰ・Ⅱ（各２） | 3 |
| | | ヨーロッパ文学史Ⅰ・Ⅱ（各２） | 3 |
| | | 【ヨーロッパの都市と文化（２）】 | 3 |
| | | 【ヨーロッパの音楽（２）】 | 3 |
| | | 【東西文化交流史（２）】 | 3 |
| | | 【比較思想（２）】 | 3 |
| | | 社会思想史（２） | 3 |
| | | 【現代文化の諸問題Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 3 |
| 人間と表現 | | 【芸術表象論Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 1 |
| | | 【西洋美術史Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 2 |
| | | 【東洋美術史Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 2 |
| | | 【日本美術史Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 2 |
| | | 【表象批判Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 2 |
| | | 【文芸方法論Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 3 |
| | | 【現代造形文化論Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 3 |
| | | 【美学および芸術学（２）】 | 3 |
| | | 【デザイン論（２）】 | 3 |
| | | 【文化･芸術制度論（２）】 | 3 |
| | | 【文化･芸術社会史（２）】 | 3 |
| アジアと現代 | | グローバルヒストリーⅠ・Ⅱ（各２） | 1 |
| | | 【アジア近現代の諸相Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 2 |
| | | 【アジアの宗教・文化Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 2 |
| | | エスニシティとネーションⅠ・Ⅱ（各２） | 2 |
| | | 【地域と移動Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 3 |
| | | 【歴史認識･叙述の諸問題Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 3 |
| | | 【ジェンダーの諸問題Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 3 |
| | | アジアとテクノロジー（２） | 3 |
| | | 都市と農村（２） | 3 |
| 文化と社会 | | 文化人類学Ⅰ・Ⅱ（各２） | 1 |
| | | 【社会人類学Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 2 |
| | | 【宗教人類学Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 2 |
| | | 【人類学史Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 3 |
| | | 【生態人類学Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 3 |
| | | 人間と環境（２） | 3 |
| | | 【現代文化と思想（２）】 | 3 |
| | | 【認知と言語の人類学（２）】 | 3 |
| | | 歴史人類学の諸問題（２） | 3 |
| | | 【民族誌の諸問題Ⅰ～Ⅲ（各２】 | 3 |

*１．科目名のカッコ内数字は単位数を示します。*
*２．＊のついた科目は、人文総合科学インスティテュート学生のみが受講できます。*
*３．＃のついた科目は、重複受講ができます。*
*４．【　】のついた科目は、開講していません。*
*５．旧カリキュラムは順次閉講されますが、2002年度以前の入学者も新カリキュラムを自由に履修でき、専門科目として認定されます。2005年度からは完全に新カリキュラムに切り替わります。*
*６．下線のついた科目は、その回生しか受講できません。*

## インスティテュート５領域６～８回生

| 分野 | | 科目名 | 配当回生 |
|---|---|---|---|
| 各領域共通 | 講読 | ＃人文総合科学外書講読Ⅰ・Ⅱ（各２） | 2 |
| | | ＃人文総合科学外書講読Ⅲ・Ⅳ（各２） | 3 |
| | 小集団 | ＊人文総合科学研究入門（４） | １のみ（通年） |
| | | ＃人文総合科学基礎講読（４） | ２のみ（通年） |
| | | ＃人文総合科学演習Ⅰ（４） | ３のみ（通年） |
| | | ＃人文総合科学演習Ⅱ（４） | ４（通年） |
| | | ＊卒業論文（４） | ４（通年） |
| 人間と情報（2000年度まで）2001年度以降入学生は受講不可 | | 【認知科学概説Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 1 |
| | | 【認知心理学Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 2 |
| | | 【人工知能概説Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 2 |
| | | 【言語情報処理Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 2 |
| | | 【神経情報科学Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 2 |
| | | 【認知科学特殊講義Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 2 |
| | | ＊認知科学実験実習Ⅰ（２） | ２（通年） |
| | | ＊認知科学実験実習Ⅱ（２） | ３（通年） |
| 言語と文化 | | 【比較文化概論Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 1 |
| | | 【比較文学概論Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 2 |
| | | 【応用倫理（２）】 | 2 |
| | | 【ヨーロッパ現代思想（２）】 | 3 |
| | | ヨーロッパ文化史Ⅰ・Ⅱ（各２） | 3 |
| | | ヨーロッパ文学史Ⅰ・Ⅱ（各２） | 3 |
| | | 【ヨーロッパの都市と文化（２）】 | 3 |
| | | 【ヨーロッパの音楽（２）】 | 3 |
| | | 【東西文化交流史（２）】 | 3 |
| | | 【比較思想（２）】 | 3 |
| | | 社会思想史（２） | 3 |
| | | 【現代文化の諸問題Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 3 |
| 人間と表現 | | 【芸術表象論Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 1 |
| | | 【西洋美術史Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 2 |
| | | 【東洋美術史Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 2 |
| | | 【日本美術史Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 2 |
| | | 【表象批判Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 2 |
| | | 【文芸方法論Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 3 |
| | | 【現代造形文化論Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 3 |
| | | 【美学および芸術学（２）】 | 3 |
| | | 【デザイン論（２）】 | 3 |
| | | 【文化･芸術制度論（２）】 | 3 |
| | | 【文化･芸術社会史（２）】 | 3 |
| アジアと現代 | | グローバルヒストリーⅠ・Ⅱ（各２） | 1 |
| | | 【アジア近現代の諸相Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 2 |
| | | 【アジアの宗教・文化Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 2 |
| | | エスニシティとネーションⅠ・Ⅱ（各２） | 2 |
| | | 【地域と移動Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 3 |
| | | 【歴史認識･叙述の諸問題Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 3 |
| | | 【ジェンダーの諸問題Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 3 |
| | | アジアとテクノロジー（２） | 3 |
| | | 都市と農村（２） | 3 |
| 文化と社会 | | 文化人類学Ⅰ・Ⅱ（各２） | 1 |
| | | 【社会人類学Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 2 |
| | | 【宗教人類学Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 2 |
| | | 【人類学史Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 3 |
| | | 【生態人類学Ⅰ・Ⅱ（各２）】 | 3 |
| | | 人間と環境（２） | 3 |
| | | 【現代文化と思想（２）】 | 3 |
| | | 【認知と言語の人類学（２）】 | 3 |
| | | 歴史人類学の諸問題（２） | 3 |
| | | 【民族誌の諸問題Ⅰ～Ⅲ（各２）】 | 3 |

*1．科目名のカッコ内数字は単位数を示します。*
*2．＊のついた科目は、人文総合科学インスティテュート学生のみが受講できます。*
*3．＃のついた科目は、重複受講ができます。*
*4．【　】のついた科目は、開講していません。*
*5．旧カリキュラムは順次閉講されますが、2002年度以前の入学者も新カリキュラムを自由に履修でき、専門科目として認定されます。2005年度からは完全に新カリキュラムに切り替わります。*

## 2 履修方法

**必修科目**（卒業するために必ず単位を取得しなければならない科目）

| | | |
|---|---|---|
| ① | 人文総合科学演習Ⅱ（４回生以上）<br>ゼミナールⅡ（テーマリサーチ）（4回生以上）＊ | １科目４単位選択必修 |
| ② | 卒業論文（４回生以上） | ４単位必修 |

＊６回生以上は選択不可

**登録必修科目**（必ず登録・受講しなければならない科目）

| | | |
|---|---|---|
| ① | 人文総合科学研究入門（１回生のみ） | １科目４単位 |
| ② | 人文総合科学基礎講読（２回生のみ） | １科目４単位 |
| ③ | 人文総合科学外書講読Ⅰ・Ⅱ（２回生以上） | ２科目４単位<br>（2003年度以降入学生） |
| ④ | 人文総合科学演習Ⅰ（３回生のみ）<br>ゼミナールⅠ（テーマリサーチ）（3回生のみ） | １科目４単位選択 |

**専攻科目以外の登録必修科目**

・リテラシー入門（教養科目：４単位）　１回生通年
・外国文化講読（第一外国語）（人文科学総合講座：４単位）　３回生通年

※１～５回生の社会人学生の皆さんは、登録必修科目はありません。ただし、条件の許す限り、上記の登録必修科目は履修してください。
６回生以上の社会人学生の皆さんの必修科目・登録必修科目は、一般学生と同様です。

## 3 受講登録上の注意

### 1　回　生

1．下記の必修科目・登録必修科目は、クラス指定を行っています。クラスは掲示板にて発表します。指定されたクラスを本登録してください。

**人文総合科学研究入門、外国語科目（第１・第２）、リテラシー入門**

### 2　回　生

1．下記の科目は、クラス指定を行っています。指定されたクラスを本登録してください。

①**初修外国語・応用**⇒第１外国語として初修外国語を選択したみなさんが履修します。クラスは掲示にて発表します。

②**英語Ⅶ・Ⅷ**⇒第１外国語として英語を選択したみなさんが履修します。１回生終了時に希望調査が行われ、４月時にクラスが発表されます。

2．下記の科目は予備登録科目です。指定された日に予備登録を行ってください（「履修要項」を参照）。予備登録の結果決定したクラスを本登録してください。

**人文総合科学基礎講読、人文総合科学外書講読Ⅰ・Ⅱ**

### 3　回　生

1．下記の科目は予備登録科目です。指定された日に予備登録を行ってください（「履修要項」を参照）。予備登録の結果を本登録してください。

①**人文総合科学演習Ⅰ、ゼミナールⅠ（テーマリサーチ）***

⇒すでに前年度中に予備登録を済ませ許可を受けたクラスを本登録してください。

②**人文総合科学外書講読Ⅲ・Ⅳ**

③**外国文化講読**（第１外国語と同じ語種）

### 4・5回生、昼6～8回生

1．下記の科目は、本年度の登録で卒業の見込みがでる方のみが受講できます。決定したクラスを本登録してください。

①**人文総合科学演習Ⅱ、ゼミナールⅡ（テーマリサーチ）***

⇒すでに前年度中に予備登録を済ませ許可を受けたクラスを本登録してください。

②**卒業論文**⇒卒論ゼミと同一のクラスを登録してください。

2．下記の科目は、本年度の登録で資格取得の見込みがでる方のみが受講できます。授業コードを必ず受講登録OCR用紙に記入し、本登録してください。

①**（教）教育実習**⇒総合演習と同一のクラスを登録してください。７回生以上は、文学部事務室へ個別相談へ来てください。。

②**（芸）博物館実習**

3．《「人間と情報」領域のみなさんへ》下記の必修科目を未取得の場合は、必ず本登録してください。

①**認知科学実験実習Ⅰ**（２回生配当科目）

②**認知科学実験実習Ⅱ**（３回生配当科目）

＊テーマリサーチ型ゼミナールは2001年度以降入学者のみが受講できます。

## 4 ユニットプログラム

文学部では2004年度より、皆さんの学び方の指針として、ユニットプログラムという考え方を提示することにしました。ユニットプログラムとは、**皆さんの所属する専攻・プログラムの特色を活かした将来像を念頭においたうえでの学び方・大学生活の過ごし方の指針**です。具体的には、専攻・プログラム毎に以下のような３つのユニットを提示します。

① **総合教養形成型ユニット**
所属する専攻・プログラムの教学を中心としつつも、文学部の幅広い学問分野を広く修め、それを活かしてどのような将来像を描けるかを提示します。

② **専門職養成型ユニット**
所属する専攻・プログラムの特色を活かした専門的力量や技能などを形成し、それを活かしてどのような将来像を描けるかを提示します。

③ **研究職養成型ユニット**
所属する専攻・プログラムの教学を深く修め、将来、（大学教員などの）研究職を目指す方策を提示します。

また、文学部には10専攻３プログラムがありますので、専攻・プログラムの特性に則した内容となっています。

そして、これはよく覚えておいて頂きたいのですが、**必ずしもこのユニットの想定する将来像だけが全てではない**、ということです。極端な話をすれば、文学部を卒業して、ロースクールに入って、弁護士になる事だってありえる選択肢なのです（実際、司法試験に合格した文学部卒業生は過去にいますし、2004年度より設置されたロースクールは、法学部卒業生以外も広く門戸を広げています）。皆さんの意欲次第では、どのような道も開けるでしょう。では、なぜこのようなユニットプログラムを提示するかという趣旨は、皆さんが皆さん自身の将来像をよく考えて、それに向かって有意義な（学問やそれ以外も含めた）学生生活が送れるようにしていただきたいからなのです。目指す将来像が明らかになれば、それに向けた学生生活も充実することでしょう。

もちろん大学生活を送っていく中で目指したい将来像が変わることはありえますし、それは全く問題ありません。したがって、ユニットプログラムは一つを選択するとか一つのユニットに所属するといったものではありません。今まで申し上げましたように、ここに提示するユニットはあくまでも例示です。これらを参考にして、皆さんが将来を考える一助になるよう願っております。

### インスティテュート学際プログラムユニット

#### 総合教養形成型ユニット

**【人材像】**

学際的なアプローチに不可欠な多角的な視点をもち、総合的な知識を駆使して、職業人としても一般市民としても、日本と世界の伝統文化を継承し、新たに創造する実力をもつ人材。どんな状況にあっても、地域文化の文化や教育などに関連した社会的活動においてリーダー的に貢献するなど、身近にも活躍の場が無限に見出だされる人材をいう。

**【カリキュラム、就職その他】**

学際プログラムの特色を生かし、自己の教養を豊かにする複数の科目を履修し、まず「人文科学」の諸テーマを俯瞰できる力を養うカリキュラムが用意されている。文化、文明、民族、国家などの世界の諸地域の歴史と現在を、歴史学的・人類学的に理解するための科目、および芸術や文芸や言語などを考察する専門科目、京都という地の利を生かして文化財や生きた工芸などを観察しその価値を伝えていく方法を学ぶ科目（学芸員課程の科目）などを組み合わせて履修するユニットである。卒業生には、諸分野にわたる就職が可能であるほか、豊かな教養をもった市民として、課程・地域において役割を発揮するという将来が期待される。

１）社会における文化的活動

地域や市町村における文化的な交流を企画し、実行する。地域の歴史や伝統が眼に見えるかたちで示される、祭りや芸術的フェスティヴァルなどを通じて、有形・無形の文化財の継承を共同体に促進するような活動ができ

る人材を養成する。

2）文化交流の活動

世界の異文化への理解と教養および外国語能力とを生かして、国内外の人々と交流する機会をさまざまな場所に創造していく人材を養成する。ボランティアによる外国人のための「日本語教育」への貢献や、外国人留学生へのホームステイなどの機会の積極的提供による活動ができる人材の養成。

3）共同体における「教育」活動

上記の活動などをとおして、自己の専門で学んだテーマや外国語、あるいは得意とする芸術表現などを、共同体における「教育」活動に応用していくことのできる人材の養成。今日、グローバルな視野と高い人間性をもつべく、自己を鍛錬しその教養と多様な知識を生かして活躍できる人材を養成する。単に教職に就く目的のたのみならず、こうした人材には教員免許の取得を促していく。

4）地域の環境保護などにかんする活動

地域の産業、産物を、歴史的・文化的遺産として継承と、自然環境の保護とそれとの共生の方法を、社会的に発言していくことのできる人材の養成。

## 専門職養成型ユニット

**【人材像】**

学際的な知識を基礎にしながら、おのおのの専門分野に特化して社会で活躍する。

**【カリキュラム、就職その他】**

多種多様な科目が用意されている学際プログラムの特色を生かして、専門領域の科目とその関連科目を履修することで、社会の多様な要請に応えていこうとするカリキュラムである。言語能力の向上と異文化理解、また日本についての理解を深めて、日本だけではなく海外でも十分通用する人材を養成するユニットである。卒業生は実際には社会のさまざまな分野で活躍しており、就職は特定の分野だけに限られてはいないが、具体的な将来像としては、以下のような専門職が考えられるだろう。

1）国際社会での専門職

各種国際機関や交流事業、国際協力機関あるいは各企業の国際部門において、たとえば外国語能力や異文化コミュニケーション能力などの専門能力を生かしながら、同時に幅広い教養をもって世界を舞台にして活躍できる人材を養成する。また、言語能力を生かして通訳や翻訳業に従事したり、外国語教育機関で活動する人材を養成する。

2）観光やマスコミ関係での専門職

とくに観光業や観光マーケッティング、航空産業、ホテル業、イベント企画その他の業種で活躍できる人材を養成する。またテレビ、新聞などのマスメディア関連への就職を視野に入れた、グローバルな視野と高い人間性をもちながら、専門知識を生かして活躍できる人材を養成する。

3）企業における各部門に対応できる人材の養成

学際プログラムの特色である幅広い知識と特化した専門を生かして、企業の各部門において活躍できる人材を養成する。

4）教員その他教育関係での専門職

教員免許を取得して教員になろうとする学生をサポートして、教育機関での就職を実現する。

## 研究者養成型ユニット

**【人材像】**

大学院へ進学し、専門的研究をおこない、将来は、変化を続ける現代社会に要請される学際的な教育によって養われた研究方法を強みとして、グローバルなネットワークのなかで、真にプラクティカルな専門的研究を専修し、研究・教育・文化活動などの分野で活躍する人材像。

**【カリキュラム、就職その他】**

めまぐるしく変化し、文明間の衝突を表面化させている現在の国際社会や、伝統から乖離した地域社会に要請される、「他者への理解」や「異文化理解」を不可欠の視点として、それぞれの専門を深めていく人材を養成するユニットである。卒業生は、大学や研究機関での研究・教育ばかりでなく、初等教育から高等教育までの現場で活躍する人材、また一般の企業や行政で、文化的分野にかかわる専門職に就く人材を養成する。

1）現代の諸問題を国内外で研究

足元にある日本やアジアの歴史と文化への自己の認識を確認しつつ、常日頃から諸外国の社会と文化への強い関心と知識を養い、世界レベルの人文学の諸問題を研究する実力をもてるようにする。そのために大学院在学中に可能な限り外国の大学や研究機関へ留学する機会をもつようにする。異文化理解へのコミュニケーション能力、言語能力を不可欠として、言語・文化・歴史・人類・芸術などの専門を深める。世界の諸文化の全体を俯瞰でき、その上で時代・地域・民族・国民などを「創造」した思潮と表象などについての分析を多角的におこなえる実力を養うカリキュラムを組んでいる。

2）テキスト、フィールドワーク、リプレゼンテーション

激しく変化する現代社会の出来事は、さまざまな「言説」によって「創造」され、そこに企図され現象する「表象」の網の目はますます複雑になっている。歴史や現在を読み解くためには、古典のテキストから現代のメディアの表現までを、観察・分析・解釈する能力が必要とされる。またそのためには、国内外へ現地調査をおこなう行動力が要求される。また論文や研究発表のみにおいてでなく、あらゆる場自己の研究成果などを伝えていくときの高い表現能力が必要とされる。カリキュラムでは、これらの能力を、先端的な研究方法を通じて身につけることができる。

3）研究の各部門に対応できる人材の養成

学際プログラムの特色である幅広い知識と特化した専門を生かして、研究・教育機関、および企業の各部門において活躍できる人材を養成する。たとえば学芸員資格をもつ者は、大学院修了後、美術館・博物館、ギャラリー、民間や行政における文化財保存などの専門職への道が開けている。

4）教員と学芸員の専門職

教員免許や学芸員の資格を取得した学生をサポートして、適切な機関への就職を促進する。

# 5 履修モデル

## 言　語　文　化

＊講義科目は一部変更される可能性もあります。
＊インスティテュート全体の科目編成は冒頭の一覧を見てください。
（教養：教養科目、人文：人文科学総合講座科目、哲・心・その他：各専攻科目）

**履修モデル**

| 科目区分 | 必修 | 登録必修 | | モデル1 言語表現と批判力 | | モデル2 文化と交通者 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | インス各論科目 | その他科目 | インス各論科目 | その他科目 |
| 1回生 | | 研究入門 | | 比較文化論Ⅰ<br>民族と文明の美術史<br>グローバルヒストリーⅠ | 言語学Ⅰ(人文)<br>日本文学概論Ⅰ(日文)<br>英米文学概論Ⅰ(英米)<br>映像と表現(教養) | 比較文化論Ⅰ<br>グローバルヒストリーⅠ<br>文化人類学Ⅰ | 言語学Ⅰ(人文)<br>史学概論Ⅰ(人文)<br>宗教学概論Ⅰ(人文) |
| | | | | 比較文化論Ⅱ<br>映像原論<br>グローバルヒストリーⅡ | 言語学Ⅱ(人文)<br>日本文学概論Ⅱ(日文)<br>英米文学概論Ⅱ(英米)<br>ジェンダー論(教養) | 比較文化論Ⅱ<br>グローバルヒストリーⅡ<br>文化人類学Ⅱ | 言語学Ⅱ(人文)<br>史学概論Ⅱ(人文)<br>宗教学概論Ⅱ(人文) |
| 2回生 | | 基礎講読 | 外書講読Ⅰ | ヨーロッパ文化史Ⅰ<br>文化と文化批判Ⅰ<br>世界の言語（通年）<br>現代美術論 | ラテン語Ⅰ(人文)<br>神話学Ⅰ(人文)<br>民俗学Ⅰ（人文）<br>日本文学史Ⅰ・Ⅲ(日文)<br>英文学史Ⅰ(英米)<br>米文学史Ⅰ(英米) | ヨーロッパ文化史Ⅰ<br>文化と文化批判Ⅰ<br>文化とポストコロニアル批評Ⅰ<br>社会思想史<br>人間と宗教 | 神話学Ⅰ(人文)<br>民俗学Ⅰ(人文)<br>社会言語学Ⅰ(人文)<br>西洋史概説Ⅰ～Ⅴ(西史) |
| | | | 外書講読Ⅱ | ヨーロッパ文化史Ⅱ<br>文化と文化批判Ⅱ<br>人間と環境<br>美学・芸術社会学 | ラテン語Ⅱ(人文)<br>神話学Ⅱ(人文)<br>民俗学Ⅱ(人文)<br>日本文学史Ⅱ・Ⅳ(日文)<br>英文学史Ⅱ(英米)<br>米文学史Ⅱ(英米) | ヨーロッパ文化史Ⅱ<br>文化と文化批判Ⅱ<br>文化とポストコロニアル批評Ⅱ<br>人間と宗教 | 神話学Ⅱ(人文)<br>民俗学Ⅱ(人文)<br>社会言語学Ⅱ(人文)<br>西洋史概説Ⅰ～Ⅴ（西史） |
| 3回生 | | 演習Ⅰ・外国文化講読 | 外書講読Ⅲ | 比較文学特論Ⅰ<br>ヨーロッパ文学史Ⅰ<br>芸術とメディア | 日本語と文化Ⅰ(日文)<br>英米文学特殊講義(英米) | ヨーロッパ文化史Ⅰ<br>ヨーロッパ文学史Ⅰ<br>芸術とメディア<br>歴史人類学の諸問題<br>他者認識の歴史<br>歴史認識・叙述の諸問題 | 西洋史特殊講義Ⅰ～Ⅷ(西史) |
| | | | 外書講読Ⅳ | 比較文学特論Ⅱ<br>ヨーロッパ文学史Ⅱ（Ⅲ）<br>民族と芸術<br>民族誌の諸問題<br>地域と移動 | 日本語と文化Ⅱ(日文)<br>英米文学特殊講義（英米） | ヨーロッパ文化史Ⅱ<br>ヨーロッパ文学史Ⅱ<br>民族と芸術<br>民族誌の諸問題<br>地域と移動 | 西洋史特殊講義Ⅰ～Ⅷ(西史) |
| 4回生 | 演習Ⅱ・卒論 | | | | | | |

※「人文総合科学外書講読Ⅲ・Ⅳ」は登録必修ではありませんが、極力、受講するようにしてください。

**モデル1　言語表現と批判力**

ヨーロッパやそれ以外の地域の文学を、文字に書かれたものやそうでないものを含めて、様々な角度から比較、分析し、われわれにとって言語表現が何を残しうるのかを歴史的に考える。

**モデル2　文化と交通者**

ヨーロッパ地域の諸文化を、ナショナルな枠組みにとらわれずに、周縁地域も視野に入れ、時間軸、空間軸を自由に組み合わせて、多元的視点から比較、考察し、枠にはまらない、批判的視点の獲得をめざす。

# 芸　術　表　象

## 履修モデル

| 科目区分 | 必修 | 登録必修 | | モデル1<br>美術とデザイン | | モデル2<br>映像とメディア | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | インス各論科目 | その他科目 | インス各論科目 | その他科目 |
| 1回生 | | 研究入門 | | 映像原論<br>民族と文明の美術史<br>比較文化論Ⅰ・Ⅱ<br>文化人類学Ⅰ・Ⅱ | 美と芸術の論理（教養）<br>映像と表現（教養）<br>言語学Ⅰ・Ⅱ（人文） | 映像原論<br>民族と文明の美術史<br>比較文化論Ⅰ、Ⅱ<br>グローバル・ヒストリーⅠ・Ⅱ | 美と芸術の論理（教養）<br>映像と表現（教養）<br>現代の科学技術（教養） |
| 2回生 | | 基礎講読 | 外書講読Ⅰ<br>外書講読Ⅱ | ヨーロッパの美術・デザイン<br>オリエント美術史<br>仏教美術史<br>日本絵画史<br>西洋近代美術史<br>現代美術論<br>ヨーロッパ文化史Ⅰ・Ⅱ<br>人間と宗教 | メディア論（人文）<br>哲学史Ⅴ・Ⅵ（哲）<br>視覚芸術（人文）<br>色彩論（人文）<br>西洋史概説Ⅰ～Ⅴ（西史）<br>神話学Ⅰ・Ⅱ（人文）<br>キリスト教思想Ⅰ・Ⅱ（人文） | ヨーロッパの美術・デザイン<br>日本絵画史<br>西洋近代美術史<br>現代美術論<br>美学・芸術社会学<br>映画史<br>文化と文化批判Ⅰ・Ⅱ<br>社会思想史<br>人間と環境 | メディア論（人類）<br>哲学史Ⅴ・Ⅵ（哲）<br>視覚芸術（人文）<br>色彩論（人文）<br>西洋史概説Ⅰ～Ⅴ（西史）<br>神話学Ⅰ・Ⅱ（人文）<br>社会言語学Ⅰ・Ⅱ（人文） |
| 3回生 | | 演習Ⅰ・外国文化講読 | 外書講読Ⅲ<br>外書講読Ⅳ | 芸術とメディア<br>民族と芸術<br>京都の美術<br>ヨーロッパ文化史Ⅰ・Ⅱ<br>比較文学特論Ⅰ・Ⅱ<br>歴史認識・叙述の諸問題<br>歴史人類学の諸問題<br>民族誌の諸問題 | | 芸術とメディア<br>映像と社会<br>京都の美術<br>ジェンダー・ポリティクス<br>ジェンダーと文化<br>他者認識の歴史<br>史料が語る世界<br>フィールドワークⅠ・Ⅱ | |
| 4回生 | 演習・卒論 | | | | | | |

※「人文総合科学外書講読Ⅲ・Ⅳ」は登録必修ではありませんが、極力、受講するようにしてください。

**モデル1　美術とデザイン**

古今東西の造形表現について幅広く学ぶ。基本となるのは美術史学、とくに西洋美術史の方法論だが、人類学などの隣接諸学の成果もとりいれながら広くデザインの観点でそれを包摂し、あるいは現代の芸術表現に見られる造形の危機も講じる。比較芸術学的観点から音楽・演劇などにも考究が及ぶだろう。

**モデル2　映像とメディア**

表象の諸問題を具体的な映像に即して考察する。1枚の絵がすでに何かしらの媒体（メディウム）によった映像（イメージ）であるといった原初的意味の検討もさることながら、具体的には映画という表現形式の歴史的・制度的検討を主軸に置きながら、広く（マス）メディア理論も射程に含めた考究が目指される。

# 歴　史　人　類

## 履修モデル

| 科目区分 | 必修 | 登録必修 | | モデル1<br>異文化と他者 | | モデル2<br>アジアの争点 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | インス各論科目 | その他科目 | インス各論科目 | その他科目 |
| 1回生 | | 研究入門 | | 比較文化論Ⅰ<br>グローバルヒストリーⅠ<br>文化人類学Ⅰ | 言語学Ⅰ（人文）<br>美と芸術の論理（教養） | グローバル・ヒストリーⅠ<br>文化人類学Ⅰ | 宗教学概論Ⅰ（人文）<br>現代の科学技術（教養）<br>現代の世界経済（教養）<br>国際化と法（教養） |
| | | | | 比較文化論Ⅱ<br>民族と文明の美術史<br>グローバルヒストリーⅡ<br>文化人類学Ⅱ | 言語学Ⅱ（人文） | グローバル・ヒストリーⅡ<br>文化人類学Ⅱ | 宗教学概論Ⅱ（教養）<br>社会学入門（教養）<br>ジェンダー論（教養）<br>現代環境論（教養）<br>科学と技術の歴史（教養） |
| 2回生 | | 基礎講読 | 外書講読Ⅰ | 文化と文化批判Ⅰ<br>文化とポストコロニアル批評Ⅰ<br>映画史<br>エスニシティーとネーションⅠ<br>社会構造と文化 | 神話学Ⅰ（人文）<br>民俗学Ⅰ（人文）<br>社会言語学Ⅰ（人文） | オリエント美術史<br>社会思想史<br>エスニシティーとネーションⅠ<br>人間と宗教 | 社会学概論Ⅰ（人文）<br>民俗学Ⅰ（人文） |
| | | | 外書講読Ⅱ | 文化と文化批判Ⅱ<br>文化とポストコロニアル批評Ⅱ<br>美学・芸術社会学<br>エスニシティーとネーションⅡ<br>人間と環境 | 神話学Ⅱ（人文）<br>民俗学Ⅱ（人文）<br>社会言語学Ⅱ（人文） | 仏教美術史<br>エスニシティーとネーションⅡ<br>近現代の諸相<br>アジアとテクノロジー<br>人間と環境 | 社会学概論Ⅱ（人文）<br>民俗学Ⅱ（人文） |
| 3回生 | | 演習Ⅰ・外国文化講読 | 外書講読Ⅲ | 芸術とメディア<br>ジェンダー・ポリティクス<br>他者認識の歴史<br>民族誌の諸問題 | | ジェンダー・ポリティクス<br>地域と移動<br>歴史人類学の諸問題<br>歴史認識・叙述の諸問題 | |
| | | | 外書講読Ⅳ | 映像と社会<br>ジェンダーと文化<br>歴史認識・叙述の諸問題<br>地域と移動 | | ジェンダーと文化<br>都市と農村<br>民族誌の諸問題<br>史料が語る世界 | 地域政策（人文） |
| 4回生 | 演習・卒論 | | | | | | |

※「人文総合科学外書講読Ⅲ・Ⅳ」は登録必修ではありませんが、極力、受講するようにしてください。

モデル1　異文化と他者

ヨーロッパだけではなく、世界の様々な地域の文化の生成と交流、衝突の様態を比較し、分析する。その際、文化人類学や芸術表象的視点も視野に入れ、我々にとって異文化とは何か、他者とはいかなる意味をもつのか検討する。

モデル2　アジアの争点

アジアの諸社会・文明にとってアクチュアルな争点（グローバリゼーション、国民国家とナショナリズム、エスニシティー、アジア諸地域の「文明化」過程、ヒトやモノの移動や交通、ジェンダー、技術、環境、植民地化）などを、自己の問題意識と関心のある地域に即して各自が選び取り、追求していく。

# Ⅲ

# 学修を進めるにあたって

## 1 文献資料室と共同研究室

文学部には、教員・学生・院生の研究・学修の場として共同研究室と人文系文献資料室が設けられています。文学部教学の大きな目標である専門的知識・技能の養成や、自主的・集団的な学修・研究の充実のために、この二つの場が大きな役割を果たしています。

**〈人文系文献資料室〉**

修学館地階にある文献資料室には、主に文学部の学問・研究に関する専門図書、学会や大学が発行する学術雑誌、各種の資料（歴史学関係の史料を含む）、辞典、図録などが集中的に保管されています。それぞれの専攻・コースやインスティテュートに関する専門図書や資料などは、それぞれの専攻が重点をおいてきた専門分野や収書の方針によって特色をもつものとなっていますが、その中でも特に線装本など貴重な図書や、『立命館文學』との交換で寄贈された学術雑誌など、二度と収書することが至難なものについては、別置されています。しかし大部分の図書は開架閲覧方式がとられていて、書庫に入って図書を検索し、閲覧することができます。文献資料室の書庫は下記のとおり、各専攻関係の図書は次のように配置されています。

書庫Ａ　日本文学・日本史・中国文学・東洋史・製本和雑誌（大学・一般）
書庫Ｂ　キング・サイズなどの大型資料類
書庫Ｃ　漢籍・埋蔵文化財・未製本カレント・明大本・和装本など　※書庫Ｃの図書は閉架請求制です。
書庫Ｄ　哲学・心理学・英米文学
書庫Ｅ　西洋史・地理学・文化人類学・インスティテュート・地方史・中国雑誌・洋雑誌

研究内容が部分的に重なり、隣接分野となっている専攻間の図書・資料を相互に利用しやすいよう同一書庫に配置しています。それによって広い基礎をもち水準の高い学修研究の発展と、新しい研究課題の発見をが期待できるでしょう。

人文系文献資料室の図書は、全体として専門性の高いものが多く、したがって低回生にとって直接利用できる図書は少なく、広い教養を身につけるための啓蒙書、文学作品、一般の雑誌などについては、中央図書館の利用が望まれます。しかし上回生のレポート作成や卒業論文、修士論文の作成にあたっては、人文系文献資料室に収められた図書の利用が必要となる場合があります。所定の申し込みをすれば、開架閲覧を許していない貴重図書・学術雑誌の閲覧も可能です。

**〈専攻･インスティテュート共同研究室〉**

専攻院生・学生が教員とともに、専攻の学問研究について自主的な共同研究をおこなう場として10専攻およびインスティテュートそれぞれに共同研究室が設けられています。それぞれ違いがありますが、専攻・インスティテュートの教学にとって基本的な辞典などの図書 、また演習・講読などのテーマと直接かかわりのある専門図書などが置かれています。実験実習的な研究教育が重視されている心理学・地理学・日本史学専攻の考古学コースでは、機器・用具類も充実しており、専用の実験･実習室施設もあります。

これら共同研究室は、大学の休業日（土曜日・日曜日・祝日・夏期の一斉休業日、年末年始など）、および授業や卒業論文・修士論文の試問審査など、文学部の教務・事務にかかわって使用制限する場合を除いて、原則として毎日午前９時から午後９時30分まで利用できます。ただし、実際の時間は、専攻によって異なっていますので、各専攻の規定に従ってください。共同研究室の運営や利用の仕方および、日常的な運営については、教員・学生・院生の三者で協議することにしており、相互に円滑で節度のある使用を心がけねばなりません。

## 2 クラスロッカーの使用方法について

### （１）クラスロッカーについて

クラスロッカーは、研究入門、基礎講読、講読演習、演習などのクラス単位で必要なものを、一時的に保管しておくものです。例えば、研究入門の講義時に欠席者用レジュメなどを保管したりするために利用するものです。したがって、個人用の荷物を保管するようなことは禁止をしています。また、基本的に、カギをしめないで使用していただきますので、紛失しては困るものなどは収納しないようにしてください。

### （２）使用の手順

１．文学部事務室へ、クラス単位であらかじめ利用の申請し、使用するロッカーの場所を決めます。
申請は随時受け付けますので、必要がある場合は、文学部事務室で手続きして下さい。
※オリエンテーション期間の「オリター懇談会」で選出する「クラス代表者」が、クラスを代表して手続きをするようにしてください。

２．使用できる期間内は、必ず指定のロッカーを使用し、クラス単位で管理してください。

３．使用期限が来れば、クラス単位で荷物の撤収を行ってください。

### （３）注意事項

利用上以下の点を注意して下さい。

①クラスロッカーは、事前の申請に基づいてクラス番号を付番し、クラス指定しますので、確認して下さい。クラスロッカーは１クラス１ロッカーではありません。

②ロッカーは整理整頓に心がけて下さい。複数クラスで利用をお願いした場合、必ず物品のクラス間違いがないようにして下さい。

③物置ではありませんから、ロッカーに保管するのにふさわしくないものは入れないで下さい。また、施錠しませんので、貴重品など紛失しては困るものは入れないで下さい。

④万一紛失・盗難にあった場合、大学は責任を負いませんので注意してください。

⑤サークルなどの団体が無断で使用した場合は、速やかに撤去します。

⑥クラスロッカーの利用期限は、翌年３月15日（休日の場合はその前日）までです。ロッカーにはいっている物はすべて各クラスの責任で移動して下さい。翌年３月16日以降は、文学部事務室の責任で物品の廃棄をおこないます。

## 3 セミナーハウスの正課用利用の手引き

### （１）セミナーハウスについて

立命館大学では、正課・課外活動などで活用して、多様な学生生活を通じて得られる「学びと成長」を支援する施設として、セミナーハウスがあります。ここでは簡単に紹介します。ぜひ各クラスで積極的に利用してください。

なお、今年の４月から６月にかけて、新入生のクラスとして合宿をする場合は、別途の手続きになりますので、（５）の説明を参照してください。

１．衣笠セミナーハウス　（立命館大学より徒歩５分）

①衣笠キャンパスに隣接したアカデメイア立命21の中にあり、洋室の会議室と宿泊室および和室の会議室兼宿泊室を擁し、宿泊できる人数は最大で150名の収容力を持つ施設です。

②国際平和ミュージアムも併設していますので、見学を兼ねてご利用ください。（併設施設は学生証提示で無料）

２．エポック立命21（びわこ・くさつキャンパス内）

①BKCにもセミナーハウスがあります。

### （２）施設の利用料金

正課で利用する場合は、宿泊料は無料となります。なお、正課以外でも担当教員の承認印を得ればクラス単位で利用する時は小集団クラス援助金で利用できます。

### （３）施設の予約方法

利用にあたってはまず利用したいセミナーハウスに電話にて予約をしてください。利用日の３カ月前から１週間前（なるべく２週間前）までに、直接電話で利用期間・人数等を申請し、予約をしてください。（退館時に次回予約日の予約もできます）予約後の手続き等は、衣笠学生センター（研心館２階）に必要な書類がありますので、ご確認ください。

衣笠セミナーハウス：０７５－４６５－８１１０　エポック立命21：０７７－５６１－２７００

### （４）その他

正課以外で利用する場合は、宿泊料が必要です。詳しくは衣笠学生センターにてご相談ください。

### （５）新入生クラス合宿の手続きについて

４月から６月にかけては、クラス、ゼミが集中的に利用する可能性があるため、あらかじめ、学部枠が設けられています。新入生クラスが、クラス合宿を行いたい場合は、この「学部枠」内で優先的に予約することになります。この期間にクラス合宿を行いたいクラスの代表者は、文学部事務室学生係にご相談ください。

## 4 学生印刷室の利用について

### （１）利用方法の説明

各小集団クラスでは、正課授業時に利用するレジュメ印刷の際に、学生印刷室に設置されている輪転機を利用することができます。輪転機は原稿１枚につき、10部以上の印刷をするときに利用できます。なお、原稿を作成する際にはB４もしくはA４にしてください。

①文学部事務室前にある「小集団クラス印刷申請書」に必要事項を記載し文学部事務室窓口に申請して下さい。（事前に小集団クラス担当者許可印が必要です。）

②記入された「小集団クラス印刷申請書」と「学生証」を窓口に提出して下さい。窓口に設置されている受付台帳に記載した後、学生証と引き換えに「印刷機の鍵」をお渡しします。

③輪転機は、清心館1階　学生談話室東北角の学生印刷室内にあります。

④印刷用紙は、文学部事務室内東側にあります。申請した枚数をもって、印刷をして下さい。（印刷に失敗する場合があるので、若干余分に持っていってください。学生印刷室内には、コピー機用の用紙が用意されていますが、これはコピー専用ですので、輪転機での印刷には、絶対に利用しないで下さい。）

⑤輪転機の利用方法は、学生印刷室内の掲示を確認してください。

⑥輪転機の使用が終了したら、速やかに「鍵」を事務室窓口まで返却して下さい。引き換えに学生証を返却します。（未使用の印刷用紙は、事務室内東側の位置に戻してください。）

### （２）「学生印刷室」の利用時間帯

１．印刷は以下の時間帯で使用するようにして下さい。終了時間には必ず印刷が終了するようにして下さい。

**授業日の ９：00～21：30**

※窓口時間等は変更する場合がありますので、掲示等注意して下さい。

### （３）利用にあたっての諸注意

①鍵は他人に貸し出さないで下さい。また、他人の学生証でカギを貸すことはできません。

②「学生印刷室」は印刷物を散らかさないよう、整理整頓に心がけてください。

③輪転機が故障したら、機械を無理に操作せずに、事務室まで連絡してください。

④不正使用は絶対に行わないで下さい。もし不正利用が判明した場合、所属クラスの輪転機利用禁止、利用代請求などを行います。

⑤学生印刷室内には、コピー機用の用紙が用意されていますが、これはコピー専用ですので、輪転機での印刷には、絶対に利用しないで下さい。不正に利用したことが発見された場合は、賠償していただきます。

## 5 自主ゼミ援助制度について

### （1）自主ゼミ制度について

授業で学んだことをさらに発展させ、その研究成果をまとめていくため、学部内のメンバーで組織された学習グループ（自主ゼミ）に対して、施設貸与や資料作成の費用を援助する制度です。

### （2）参加資格

文学部生・文学研究科生の登録が可能です。他学部・聴講生・科目等履修生・卒業生は登録できません。

### （3）援助内容

1．経済援助　生協で利用できるコピーカード　1,000円分
2．施設貸与援助　学習会・研究会のための施設貸与および自治会輪転機使用（用紙は各自で準備）
3．自主ゼミ用掲示板の使用　清心館１Fにある自主ゼミ用掲示板を使用することができます。

### （4）受付期間・受付方法

登録の受付は、年２回、４月と10月に文学部事務室または文学部自治会（清心館１F）にて行います。
登録手続きの詳細については、別途掲示にてお知らせします。（４月上旬および９月中旬に掲示予定です）

### （5）その他

自主ゼミ活動についてはセメスター単位で登録を受け付けます。また、活動終了時に、活動実績・成果を報告してもらいます。

## 6 「小集団教育推進補助費」の取り扱いについて

### （1）「小集団教育推進補助費」の目的とその適用の範囲について

各小集団クラスにおける学生の自発的・集団的学習、研究活動を行うために必要な以下の目的について補助を行います。「小集団教育補助費」では下記の例のような使用が可能です。その執行については、各小集団において会計担当者を決めて文学部事務室に届け出て下さい。会計担当者には「クラス資料費伝票」を交付しますので、会計担当者が責任をもって管理・執行するようにしてください。

①生協発行のコピーカード（１回の購入限度額5,000円、１クラス15,000円まで）
②クラス共通のフロッピーディスク（１クラス2,500円まで）
③クラス教材用VTRテープ（１クラス2,500円まで）
※その他会計担当者に配布する「小集団教育推進補助費利用の手引」等を参照してください。

### （2）補助額

１クラスにつき年額15,000円です。

### （3）適用期間

毎年４月伝票交付日～翌年２月末まで利用できます。

### （4）使用の流れについて

**各クラスで、クラス代表者とともに、「クラス会計」担当者２名を選出してください。**

（１回生は、オリエンテーション期間の「オリター懇談会」において選出してください。

⇓

**クラス責任者は、事務室が主催する説明会に参加してください。**

（説明は、文学部自治会が招集するクラス代表者会議（仮称）を通じて行います。連絡があった場合には、必ず参加するようにしてください。なお、その際には、印鑑を持参の上参加してください。）

⇓

**「伝票」を交付します。**

本学生協（中川会館地下１階）にて物品等の購入ができます。使用方法は、会計担当者に配布する「小集団教育推進補助費利用の手引」および「伝票」の裏書を参照してください。１クラス年間15,000円まで使用できます。使用期間は「伝票」交付日から翌年２月末までになります。伝票をなくした場合は、事務室に申し出てください。

⇓

**「伝票」を返還します。**

使用期限（翌年２月末日）を満了した場合は３月15日（休日の場合はその前日）までに、全額（15,000円）を使用した場合は、直ちに「伝票」を事務室に返還してください。

## 7 清心館「学生談話室」の利用について

清心館の一階に「学生談話室」があります。これは、学生の交流・休憩、クラス活動、自習等を行うための施設であり、文学部が「学生談話室利用申し合わせ」に基づいて文学部自治会と共同管理しつつ、日常的な運営を学生の自治に委ねています。利用者が相互に譲り合って、気持ちよく利用できるように努めてください。

1．「学生談話室」は全面禁煙です。
2．紙コップや空き缶などゴミは必ずゴミ箱へ捨てるようにしてください。
3．椅子や机などを勝手に動かしたり、汚損したりしないようにしてください。
4．「学生談話室」を利用して行事や情宣活動を行うことは許可制です。利用を希望する団体は、文学部自治会に相談の上、文学部事務室の許可を得てください。なお、許可された場合も「学生談話室利用申し合わせ」を遵守して利用するようにしてください。

## 8 立命館大学人文学会

立命館大学人文学会は、立命館大学文学部における学問研究の発展・深化と普及を目的として、文学部の教員・院生・学生によって構成された学会です。

当学会の活動は、1934（昭和９）年『立命館文學』の創刊に始まっています。この『立命館文學』は、斯界の評価も高く、月刊にて定期的に発刊されていましたが、戦争の拡大するなか、1940（昭和15）年10月には、ついに第60号の刊行をもって一時中断のやむなきにいたりました。しかし戦後間もない混乱期の1947（昭和22）年７月には、早くも『立命館文學』第61号の刊行を再開し、今日にいたっています。

1952（昭和27）年１月に、学会は立命館大学「人文学会」として正式に発足。会則を制定しました。1969（昭和44）年には、新たに学生部会が発足し、更に充実した学会に発展しました。

『立命館文學』の発行は、2005（平成17）年３月現在で、第589号に及んでいます。

人文学会の主要な活動は、『立命館文學』の刊行と教員・学生の研究・学修の助成におかれています。『立命館文學』に掲載された研究論文は、専任教員の論文をはじめ、学部学生の卒業論文のタイトルや院生の修士論文の概要、及び院生のおこなった書評や学界動向の紹介、さらには卒業生や非常勤講師の研究論文も数多く掲載されています。発表された研究論文の内容は、わが国の各分野の学界において高い評価をうけているものが多く、『立命館文學』の学会誌としての水準の高さを示しています。

『立命館文學』に掲載されている研究論文や、修士論文・卒業論文・博士論文（概要紹介）・書評・学会動向などは、教員の講義・演習に生かされ、また学生のグループ研究・個人研究の参考に供されていますが、今後ますますひろく活用されることを期待しています。

「人文学会」はまた院生・学生の自主的研究の助成をも目的としており、そのための事業として、学生部会による研究誌の発行、あるいは公開講演会の開催なども行なっています。学生諸君は人文学会委員を選出し、それを通じて学会運営に参加することとなっています。みなさんが学会活動に深い関心をもち、積極的に参加されることをつよく望みます。

# 9 文学部事務室について

## （1）文学部事務室とは

文学部事務室は、文学部の学生のみなさんが必要な手続きをおこなったり、必要な提出物を提出する等、事務手続を行う窓口であるほか、試験や授業に関する連絡を行ったり、履修・進路・留学などの相談に応じる窓口でもあります。なお、電話での対応は、基本的に行っておりませんので、直接の来室、または、メールによる相談でお願いします。

◎ 学生印刷室にある輪転機を使用したいとき（学生証が必要です）
◎ 各専攻・プログラムの共同研究室を利用したいとき（学生証が必要です）
◎ 学割・証明書の発行（可能な限り、証明書自動発行機で購入してください。）
◎ 休学・復学・退学や追試験、受講登録、教育実習登録など、各種の手続き書類の配布・受付
◎ その他

文学部事務室を通じて、立命館大学が提供するさまざまなプログラムやサービス、施設などを活用し、積極的・主体的な学修・学生生活をおくってください。

## （2）窓口時間

※授業のない期間については、時期によって窓口時間が違いますので、よく確認してください。

**【開講期間中の窓口時間】 9：00〜11：30　および　12：30〜18：30**

2005年度より窓口時間帯が18：30までとなります。ただし、夜を中心に学修する学生、社会人学生で上記時間内に来室する事が難しい場合は、18：30〜21：30に来室してください。

なお、17：00以降は学芸員課程についての対応はできませんので注意してください。

## （3）文学部事務室ホームページ

**【立命館大学文学部事務室ホームページ】** URL　http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/lt/jimu/

文学部事務室では、主な情報をホームページで提供していますので、ご覧になってください。

（提供情報の一例）定期試験時間割、休講情報、教職課程・学芸員課程・学部独自インターンシップなどの諸連絡、その他

また、文学部事務室では、メーリングリストによる各種案内や休講情報も、随時行っています。１回生オリエンテーションでの「書類交付ガイダンス」でみなさんに配布する「RAINBOW ID通知書」のIDを活用して、情報を入手してください。